

---

# 前へ踏み出す一歩

こーしょー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

前へ踏み出す一歩

### 【Nコード】

N5931A

### 【作者名】

こーしよー

### 【あらすじ】

高校3年生の高井田佳祐<sup>たかいだけいすけ</sup>には、中学時代にある事情で疎遠になってしまった幼馴染の女の子<sup>みやしたかの</sup>がいた。ある日の放課後、その女の子宮下夏乃から数年ぶりに突然メールが届いて……そこから始まる二人のラブストーリーです。拙い文章ではありますが、よろしくお願いたします。

## ブローグ〜幼い頃の記憶〜（前書き）

よく言えば王道、悪く言えばありきたり。少し人より不器用な二人が織りなす、奇をてらわないごくごく普通のラブストーリーのつもりです。それでもよろしければこのままお進み下さい。

## ブローグ〜幼い頃の記憶〜

「けーいーちゃんっ、あーそーぼーっ！」

「いーよー！ ちよつとまってーっ！」

これは夢だ。

一八歳になった今では、どうやっただって戻る事が出来ない、こうして夢の中で思い出すことしか叶わない、俺と夏乃が幼かった頃のある日の記憶。

まるで仲の良い兄弟のように二人並んで、いつも遊び場にしてる近所の公園へ歩いていく幼い俺と夏乃。

そして現在の俺の意識はその光景を、上からぼんやりと眺めている。

「今日はなにしておそぶんだ？」

「んとねんとねっ、夏乃はねえ……おままごとがいーなっ！」

「えーやだよ、おままごとは昨日もやっただろー？」

うんざりしたような俺の反応に、夏乃の頬が可愛らしく膨らむ。

「むー……じゃあ、佳ちゃん<sup>けい</sup>はなにしたいのよー？」

「んーと、サッカーがいっ！」

「佳ちゃんのボールはやくとれないからだめ」

「んー、じゃあ……キャッチボー」

「それもつまんないからやだっ！」

「えー？ じゃあ……んーと……」

夏乃は腕を組んで悩む俺を追い越し、くるりとこちらを振り向くと、してやったりといった感じの笑みを顔一杯に浮かべ、

「はいっ！ 佳ちゃんがいけん言わないから今日もおままごとできーまりいっ！」

そう言っただけで公園の方へ走り出した。

「あーちよつとまてよ！ ずるいぞ夏乃ー！」

俺は慌てて、先に行く夏乃の背中を追いかける。

記憶なんてのは時間が経てば経つほど曖昧になっていくのは当前なわけで、俺達が追い掛けっこをしている道の周りの天気やら周りの景色やら、そういう細かいところは何だか霞がかかったようにぼやけて曖昧になっている。

それなのに、幼い夏乃の顔と、その楽しそうな声だけは、何故か鮮明に俺の目に映っていた。

「じゃあ夏乃はおかあさんのやくやるから佳ちゃんはおとうさんやくなっ！」

四方を民家に囲まれた、それらしい遊具と言えば錆びた滑り台とブランコしか無いような、そんな小さな公園。

その砂場に、二人は向かい合ってしゃがみこんでいる。

「……………」

「佳ちゃん…………どうしたの？」

不機嫌そうな表情でそっぽを向く俺に、夏乃は恐る恐る、といった感じで問い掛けてくる。

「…………サッカーしたい」

昔の自分ながら、わがままなガキだと思う。

「だ、だめだよあ、さっきおままごとするってきめたでしょ？」

「…………それならおれは1人でサッカーするから、夏乃も1人でままごとしてればいいだろ？」

「そんなあ…………ぐすっ…………うわああああん！」

「まーたすぐ泣く…………あーもーごめん！ 分かったよ！ わるかっだから！ ほら、おままごとしよ？ な？」

「…………ぐすっ…………ひっく…………佳ちゃんなんてもう知らないっ…………」

抱えた膝に顔を埋めたまま頑として動こうとしない夏乃に、幼い俺はどうすれば泣き止むのか分からずに苛々している。

「ったくもっ…………じゃあ、とくべつにおれのおよめさんにしてやる

から、だから泣くなよ」

苦し紛れに口から飛び出た俺の言葉に、夏乃の顔がほんの少しだけ動いた。

生じた膝の隙間から真つ赤になった瞳が覗き、上目遣いに俺を見上げる。

「……………およめさんってなあに？」

「そんなことも知らないのかよ？ 女の子はな、大きくなったらなかよしの男の子とケツコンして、およめさんになってずっといいしよにくらすんだ」

「……………夏乃、佳ちゃんのおよめさんになっていいの？」

「と、トクベツだからな？ だからほら、泣くのやめろよ」

今にして思えば、昔の自分はどうしてもない約束をしたものである。

「……………えへへ、うんわかった！ 約束だよ？ ずっとずっと、ずっといつしよにいよーねっ！？」

「ずっと一緒」という単語に反応して、嬉しそうにはしゃぐ夏乃。その変わり身っぷりは、つい数秒前まで泣いていたとはとても思えないほどだ。

「ちえっ……………ちゃっかりしてるんだもんなあ……………」

「わーいわーい！ およめさんおよめさあん！ 佳ちゃんだあい好きっ！」

ため息をつきながらも実は内心まんざらでもなかったりする俺に抱きつき、眩しいほどの満面の笑顔を浮かべる夏乃の顔が、少しずつぼやけていく……………。

## 第1話（5月）戻れない時間

「……だ……いだ……高井田<sup>たかいだ</sup>っ！」

「……んむ？」

俺の名前を呼ぶ怒声に、意識が過去から現在へと引きずり戻された。

突っ伏していた机から上半身を起こし、口元に垂れた涎を拭いながら、まだ覚醒しきっていない頭で周囲を見回す。

静まりかえった教室内。

生徒全員からの、非難と嘲笑の入り混じった視線が俺一人に集中している。

黒板の前には、両腕を組んで呆れたような表情を浮かべた数学担当の中年教師。

「……俺の授業中にいびきかいて寝るたぁいい度胸じゃないか？んん？」

教師の言葉でようやく、自らの置かれた状況が把握出来た。

今は六時間目の数学の授業。

始業ベルがなってから十数分は真面目に講義を聞き、板書をノートに書き写したりもしていたのだが、昼食後の満腹感と午後特有の倦怠感がタッグを組んでしまい、何時の間にか居眠りを始めてしまった。

そしてそれを見かねた教師が俺を起こし、今に至る、といった感じなのだろう。恐らく。

呆けた俺の顔を見て、わざとらしく大きなため息をつく数学教師。  
「……お前なあ、夜中まで勉強してて眠いのは分かるが、もう受験生なんだぞ？ もう少し自覚してもんを持って……」

思ったことが顔に出ないように注意を払いつつ、また始まりやが

ったか、と心の中で悪態をつく。

受験生なんだから真面目にやれ。

最上級生なんだからもう少し自覚を持て。

教師達は口を開けば、馬鹿の一つ覚えのようにそんな内容の小言を繰り返す。

別に俺は好きで受験生になったわけじゃないし、最上級生なんかになりたかったわけじゃない。

時間は止まってはくれず、ましてや巻き戻ってくれる事もない。ただ無情に、ただただ非情に進み続けるだけなのだ、なんてことを最近になって改めて知った。

「……嫌なら無理して授業受ける必要無いんだぞ？　いつでも教室出て行ってもらって構わないからな？」

「……すみませんっした」

言うだけ言って溜飲が下がったのか、数学教師は教卓の方へと戻っていき、授業が再開された。

出て行く筈がないと踏んだ上で敢えて「出て行きたければ出て行け」なんて言う辺りが俺の苛々を更に増幅させるも、ここで噛みついた所で勝算は薄い。

ここは高校の教室で授業時間。更に言うなら相手は教師であり、そして俺は何百人もいる生徒のうちの一人でしかない。

勝算度外視で特攻しちまえだなんて騒ぎ立てる怒りを理性で抑える。

勝てない戦はしないのが信条なのだ。

まあそうは言っても、このまま大人しく授業を受ける事が出来る程に、俺も人間がちゃんと出来上っちゃいないわけで、ほんのささやかな抵抗として、終業ベルが鳴るまで、窓の外に広がる景色をぼんやりと眺める事に決めた。



.....

元々空き家だった俺の家の隣家に宮下夏乃<sup>みやしたかの</sup>と彼女の家族が引っ越してきたのは、今から一四年前、俺が四歳の頃の事だった。

お互い一人っ子で同い年だったし、近所には子供のいる家が俺達二人の家の他に無かったというのもあって、俺と夏乃が仲良くなるのに大した時間はかからなかった。

暇さえあれば近所の公園に遊びに出掛けて、夕食の時間まで遊んだものだ。

近所を探検すると言って二人で意気揚々と家を出発したものの道に迷ってしまい、その日の夜、隣町で途方に暮れているところを警察官に保護されるという、ちょっとした事件もあった。

明日は何をして遊ぼうか、ただそれだけを考えていればよかった幼年期。

「想い出は美化されるもの」とか言うけど、それを差し引いたとしても、あの頃は本当に楽しかったと、今でも思っている。

戻れないと分かりきっているからこそ尚更、あの頃に戻れたら、なんて子供のような事を考えてしまう。

## 第2話（5月）～突然のメールと拭い去れぬトラウマ～

その日の授業も終わり、机と椅子を教室の後ろに下げる。

今週は掃除当番じゃないし、放課後居残りさせられるような用事も特に無いのでさっさと家に帰ろうかと鞆を背負ったところで、

「けーいーすけっ!」

弾んだ声と共に背後から強く肩を叩かれた。

「……っ!」

その痛みに、危うく大声を出しそうになった。

「……ちったあ加減しろっていつも言ってたろこの馬鹿力!」

振り返りながら、俺の背後に立つ男の鳩尾に、三割くらいの力を込めた拳を叩き込む。

こんなことする人間は一人しか思いつかないので、躊躇はしない。

「おふゅっ!」

よし入った。

確かな手応えが拳に伝わる。

背後の男は不思議な悲鳴を漏らすと身体をくの字に曲げ、その場に膝をついた。

お、軽く痙攣してる。

「お、お前も手加減しろって……」

「聞く耳もたん。自業自得だ」

やられたらやり返す。そんなのは当然の話だ。

こっちだって叩かれた箇所は未だにじんと痺れている。

「で？ 何か用か上野?」

今俺の目の前で蹲っているのは上野雄大。うえのゆうだい

俺の数少ない友人その一だ。

「今日帰り飯食ってこーぜ!」

すくつと立ち上がり、今のパンチのダメージなんざ残っていませ

ん、とでも言うかのような人当たりのいい笑顔を浮かべて親指を立てる上野。

……やはり追い討ちに蹴りでも入れておくべきだったか。次からは意識狩り飛ばすくらいの気持ちでいつてもいいかもしれない。それにしたって、こいつの回復の速さは異常だ。

「あー……どーすつかない」

返答は一応決めているのだが、即答するのは流石に悪いような気がして、迷っていますよ、という風にぼりぼりと側頭部をかく。

別にこれから用事はないのだが、俺の後ろポケットに収まっている大蔵省は、最近の不況の煽りを食らってなのか、先々月から財政難に陥っている。

極力出費は避けたいところなのだ。

「北澤も来るだろ？」

目の前の馬鹿はそんな俺の意見を聞かないうちに、俺の背後で教科書を通学鞆にしまっている北澤にも声をかける。

「ん？ んー……ラーメンなら付き合ってやらなくもない」

きたざわしんじ  
北澤信次。

俺の数少ない友人その二である。

ちなみにクラス内で何か話し合いでも行われたのか、俺達の席は北澤、俺、上野の順で縦に連続して並んで配置されている。

「ほらあ北澤も行くつつつてんだしさあ、佳祐も行こーぜえ？」

猫撫で声を上げながら俺の腕に絡み付いてくる上野。

「あーもう分かった！ 付き合ってやつからひつつくな気持ち悪いっ！ ……ったく」

ここまですると半ば強制に近い。

晩飯食って帰るってお袋に連絡しなきゃな、と考えたところで、制服の胸ポケットに入れていた携帯が唸り始めた。

取り出してディスプレイを見ると、そこには「新着メール1通」の文字。

差出人の欄には、見たことの無いアドレスが表示されている。

寂しい話だが、俺のアドレスを知っている人間なんて、今日の前にいる北澤と上野を含めても両手で数えるほどしかない。

大方最近流行りの広告メールだろうとあたりをつけるが、万が一という事も考えられるので一応、消去する前に本文を表示させる。

件名：たすけて

本文：かのですいきなりごめん乞う門前まで来ておねがいはいやく

……ああ、あいつアドレス変えたのか。そう言えばあいつからメールもらうなんて何年ぶりかなあ……ってはあっ！？

悠長に現実逃避してる場合ではなさそうな文面。

句読点が排除され、漢字が誤変換されてる辺りが、事態が急を要してるという事を俺に伝える。

乞う門前……こうもんまえ……校門前か！

「あっ！ 佳祐逃げんたって！ おい……！」

上野の制止の声を背中に聞きながら、俺は騒がしい教室を後にして、嫌な予感を振り払うかのように校門目指して全力で走り出した。

………

幼年期を終え、小学、中学と進級しても、俺と夏乃の友情に亀裂が入る、なんて事は無かったが、その代わりそれ以上に関係が進展する事も無かった。

出来る事なら「幼馴染み」より前に進みたい。

だけど一歩踏み出せば、今の関係が壊れてしまいかもしれない。

それが怖くて表面上は平静を装い日々を過ごしてた。  
だけど夏乃からは何のアプローチもそれらしい仕草も無く、俺の  
心の中では想いが膨らむばかり。

危ういところで保たれていた想いと恐怖の均衡は、中学三年生の  
冬に破られる事になる。

卒業式に告白しよう。

そう決意した。

卒業すれば夏乃は俺と別の高校に進学してしまう。

そうなる前に、夏乃の気持ちを知っておきたい。

自分の気持ちを知ってもらいたい。そう思っただけで決意した。

だけど夏乃の気持ちをあんな形で知ってしまう事になるなんて、  
思いもしなかった……。

高校入試も終わって、卒業式を目前に控えたある日の放課後。そ  
の日掃除当番でゴミを焼却炉まで捨てに行く人間を決めるじゃんけ  
んに負けた俺は、行く時より軽くなったゴミ箱を脇に抱え、夏乃を  
待たせている教室に向かっていた。

ずっと昔からそうだった為なのか、登下校を共にする事があの頃  
の俺達二人にとって「当たり前」だった。

階段を二段飛ばしで駆け上り、三階の教室へと急ぐ。

教室の扉に手をかけたところで、扉の向こうから夏乃の声が聞こ  
えてきた。

「え、えっと、だって佳ちゃんは何て言うかその……小さい頃か  
らずっと一緒にいるし、れれ、恋愛対象としては見れないって言う  
か何て言うか……」

瞬間、俺の心の中で何かが音を立てて砕け散った。

扉から手を離し、先程上ったばかりの階段の方へ戻る。  
頬を伝う涙を袖で乱暴に拭い、一階まで全速力で駆け下りていった。

現実とは所詮現実であり現実でしかなく、小説やゲームのようにうまくいくとは限らない、と言うかうまいかない。

そんな事は十数年間生きてきて、心の中で分かりきっていた筈なのに、夏乃もきつと俺の事が好きでいてくれる筈と、過信している自意識過剰なもう一人の自分が、俺の中に確かにいた。

心の内に秘めた想いは伝えられる事の無いままに打ち砕かれ、誰にも知られる事なく俺の初恋が終わった。

### 第3話（5月）～数年ぶりの再開～

「あ、佳ちゃんこっちこっちーっ！」

……校門では夏乃が何食わぬ顔で俺に手を振っていた。

夏乃の近くまで駆け寄り、勢いのまま前のめりに倒れ込みそうになるのを、どうにか堪えて立ち止まる。

「はいお疲れさまー。えっと、私がメールしてからあ……一分ちよいか。さっすが中学時代は運動部だっただけのことはあるね、早い早い」

こいつの頭の中では『運動部の人間は全員足が速い』らしいが、今はそんなことどうでもいい。

両膝に手をつき、肩で息をしながら顔を上げ、腕時計に目をやりながら感心した、という風に小さく頷く夏乃を見上げる。

俺の通っている高校のものとは違う制服。

白のYシャツに紺色のブレザー。

今時の女子高生といった感じの、丈の短いプリーツスカート。

黒のハイソックスと、恐らく学校指定のものである革靴。

髪の毛は黒のショートカット。

いつだったか、俺が見かけた時には腰の辺りまで伸ばしてた気がするが、どうやらばつさり切ってしまったらしい。

思い切った感じだがこれはこれでありかもなあ、などと心の隅で考えてる場合では決してない。

「……ちよ、ちよっ……待つ……おまつ……さ、さっきのメール……」

肺はとにかく酸素を欲しがっていて、心臓はいつ破裂してもおかしくないほどに脈打っているが、それでもどうにか呼び出した理由を切れ切れに尋ねる。

そう言えばこうして向かい合って話すのは中学卒業以来になるか

ら……大体三年ぶりつてところか。

教室からここまで全力疾走で来たせいでうまく喋る事が出来ず、恥ずかしがる余裕すら全く無いってのは、考えようによってはある意味救いかもしれない。

何やらふむふむと感心していた夏乃は、俺の言葉で腕時計から顔を上げると、

「え？ ああ、そうそう、そのことなんだけどね。何でか知らないんだけど、今日学校から帰ろうとしてたら私の自転車壊れちゃってさ、でも自転車屋に修理してもらいに行くにしてもウチ帰るにしても、歩きだと結構時間かかるじゃない？ だから今日は仕方無いから家が近所の佳ちゃんに送っててもらおうかなーなんて思ったの。いやー佳ちゃんがアドレス変更してなくてホント良かったです」にへーとした笑顔を浮かべながらしれつと言ったのけやがった。

「……はあ」

自分の心配が徒労に終わったと分かった途端、体から力が抜けて、たまらずその場に座り込む。

「あ、え？ ど、どしたの佳ちゃん？」

もうあつたまきた。

安堵感が去っていけば次に湧き上がるのは怒りだ。

それが罪悪感の欠片も無い夏乃の態度によって増幅され、更に六時限目の説教で貯まったまま発散されていなかったストレスと頭の中で混ざり合い、相乗効果を生み出す。

俺はゆっくりと立ち上がると、

「……怒ってんだよっ！ 何年もメール寄越してこない人間からあんなに届いたら誰だって心配すんだろうが！ どんだけ驚いたと思っただんだ！？」

何事かと驚く周囲の視線など気にも留めず、今にも掴みかかりそうな勢いで怒鳴り散らす。

送ってきた相手が相手で、しかもあんな夢を見た後という事もあ



って、こみあげてくる怒りを自分で制御出来ない。

そもそも何年もメールを送ってこないような状況をつくったのは誰だったのか、という事まで、この時ばかりはすっかり忘れてしまっていた。

「え……えと、その……ご、ごめんなさい」

本人としては、軽いジョーク程度にしか考えてなかったのだろう。俺の突然の叱咤に、本当にすまなそうにうつむき、スカートの裾を両手でぎゅっと握る夏乃。

その姿を見た瞬間、頭に上った血が、すっと下りていった。

冷静になって湧き上がってくるのは胸をちくりと突き刺すような罪悪感。

……泣き虫なところは昔からちつとも変わってねえな。

舌打ちとと共に小さくため息をつく。

「ったく……自転車取って来るからここでちょい待ってる」

「……いいの？」

顔を上げて恐る恐る、といった感じで問いかける夏乃。

俺は照れ隠しに、さも面倒臭そうに頭を乱暴に掻きながら、

「自転車無いってんなら仕方ねえだろ。どうせお前ん家通り道だし

……ついでだよ、ついで」

意味も無く明後日の方向を見ながら、ぶっきらぼうに言うてのける。

「うん……ありがと。やっぱり佳ちゃん優しいね」

「……だ、だからついでだったってんだろ、ってかいいい年して佳ちゃんも恥ずかしいからやめろっ！」

面と向かって優しいなんて言われたのが照れ臭くて、座り込んだ拍子にズボンの尻についた砂を払い落としながら俺は駐輪場目指して歩き出

「……あっ！ 佳ちゃん待って！」

そうとして立ち止まった。

身体をぐるりと反転させ、再び夏乃に向き直る。

「ああ？」

「え、えと、……その……」

ちよいちよい、と俺の足元を指差す夏乃。

「？」

つられて俺も下を向くと、

「……あ」

成程。どうやら俺は余程慌てていたようだ。

上履きのまま校門前まで走ってきて、しかも今夏乃に指摘されるまでその事実気付いていなかったのだから。

「っ……さつさと言え馬鹿っ！」

「ご、ごめんなさいっ……」

俺の八つ当たりにはびくりと身を縮める夏乃。

「ったく……」

目標変更。ひとまず昇降口へ向けて、俺は再び走り出した。

いくら自転車が壊れたからといって、いくら家が近所だからといって、他に友人なんていくらでもいるはずなのに、何故わざわざ、中学を卒業してからは会話らしい会話もしていなかった俺に突然メールを寄越してきたのか。

心の隅に芽生えていたその疑問の答えを得ないまま。

#### 第4話（5月）～二人乗りと夕焼け～（前書き）

投稿開始から3日でアクセス数100突破ってのは多いのか少ないのか……とにかく呼んでくださってる方にはいくら感謝してもし足りませんです。読んだ感想、批評など書き込んでくださると作者が泣いて喜びますので、お暇な方はよろしくお願いします。それでは本編をどうぞ。

#### 第4話（5月）～二人乗りと夕焼け～

「……っはあっ……っはあっ……」

「うわわっ危ないってばっ！ ほ、ほら佳ちゃん頑張っつて！ もうちよっつとで坂道終りだよっ！」

俺達の乗る自転車は高校を出発した後、家とは真逆の方角にある上り坂を走っていた。

後ろに夏乃を乗せているから立ち漕ぎが出来ず、サドルに座ったままの姿勢で、大きく左右に蛇行しつつ、どうにかのろのろと進んでいる。

何故そんな事になっているのかを説明するには、俺が駐輪場から自転車に乗って、校門前まで戻ってきたところまで時間を遡らないといけない。

「いいか？ しっかり掴まっとけよ？ んじゃ出発すっぞ」

「……あっ！ ちよちよっつと待ってっ！」

「っ！？ いきなり襟引っ張んな危ねえだろ馬鹿っ！」

「ぐ、ごめんなさい……」

「ったく……で？ 何？」

「えとその、家帰る前にちよっつと寄ってほしい所があるんだけどもな……」

「寄ってほしい所だあ？ 明日じゃ駄目なのかよ？」

「う、うん、出来れば今日がいいの……駄目、かな？」

「面倒臭えなあ……どこ連れて行ってんだよ？」

「さっすが佳ちゃん！ あかね！ 展望台公園まで連れてってほしいの！」

「はあ！？ 自転車二人乗りであの坂上れってのかよ！？ やっぱ駄目だ！ 真っ直ぐ家帰っぞ！」

「ええっ！？ 連れてってくれるって言ったのにっ！ 佳ちゃんの

ケチっ！ 鬼っ！ 悪魔っ！ 詐欺師っ！」

「あーはいはいもう何とでも言え。てかそんなに行きたきゃ一人で歩いてきやいいだろ？」

「そんなあ……ぐすっ……ひっく……」

「！？ いやお前ちよつと待っ……だーもー分かったっ！ 連れてってやるからいい年してすぐ泣くなつてのっ！」

こいつに泣かれると弱えんだよなあ俺。

……というわけで女の涙に負けた俺は、夏乃の要望通り、公園へと続く坂道を登る事となった。

ほんの数分前までは、時折すれ違う人達（犬を散歩させる主婦、ウォーキング中の老夫婦、仕事帰りと思しきサラリーマン etc…）が、俺達に好奇の視線を浴びせかけながら通り過ぎていたのだが、頂上に近付くにつれて人通りもかなり減ってきた。

辺りは無駄に静かで、高校入学時に買ってから一度も油を挿していないペダルの軋む音と俺の荒い息遣い、そして夏乃の声援が時折聞こえるだけだ。

「……っはあっ……っはあっ……お前がっ……乗ってっからっ……余計にっ……体力っ……使ってんだよっ！」

「あ、何よそれー、私が重いのが悪いって言ってるの？ 駄目だよ佳ちゃん、女の子に体重の話すると嫌われちゃうんだよ？」

肩をいからせ上半身を前後に揺らしながら自転車のペダルを踏む俺の両肩に手を乗せ、体を横に向けて座り、楽しそうにけらけらと笑う夏乃。

「んな事はあつ……どーでもいいからあつ……お前は降りて歩けてのおおっ……！」

ヤケクソ気味な俺の叫びが、夕暮れの住宅街に響き渡った。

.....

民家に挟まれた細い坂道を登りきった先には、俺達の住む街の景色を一望出来る展望台を中心とした、大きな公園がある。

少々年代物で錆び付いてはいるが、滑り台やブランコ等の遊具も充実しており、日中には学校帰りの小学生や幼稚園児の遊び場、小さな子供を連れた主婦達の井戸端会議の会場となっているのだが、太陽もその姿の大半を地平線に沈めてしまった今の時間、園内に人影は無い。

「……つぶ……おえっ……」

数百メートルの急勾配を二人乗り自転車で走破した俺は、赤茶色の煉瓦が敷き詰められた地面に両の手足を投げ出し、横倒しになった自転車の隣で仰向けに寝転がって、胸にこみ上げる想い、もとい吐き氣と戦っていた。

「よかった間に合ったあ……ほらあ佳ちゃんっ！そんな所で寝転がってないでこっちおいでよおっ！」

そんな俺の氣も知らず、展望台の頂上の、落下防止用に設置されているフェンスの中程に足をかけて身を乗り出し、はしゃいでいる夏乃。

「……あんの野郎っ……誰のっ……せいだと……思っ……つぶ」

ここで下手に怒鳴ってまた夏乃に泣かれてはたまったものじゃない。まあどうせ、それ以前に怒鳴る程の余裕が無い。

息も切れ切れに悪態をつく、俺はゆっくりと身を起こし、墓から這い出て来たばかりのゾンビのような重い足取りで、展望台の階段を手摺につかまりながら一段ずつ上っていく。

「ほら早くこっち来て見て見て！」

「お前は本っ当いい加減にし……」

手招きする夏乃の元へ辿り着く頃には息も少しは整い、やっぱりこいつにや一度しっかり説教してやらなければと口を開きかけた俺は、展望台からの景色を見た瞬間、言葉を失った。

沈む夕陽に照らされ、光のオレンジと影の黒とのコントラストが映える街はどこか幻想的で、いつも見慣れた自分の住んでいる街とは思えない。

芸術的な感性は欠片も持ちあわせていない俺でも素直に美しいと思える、そんな光景が俺の眼下に広がっていた。

「えっへへーすごいっしょ？　ここ最近の私のお気に入りの場所なんだよねー」

俺の隣で誇らしげに腰に両の拳をあて、えっへんと年齢相応に發育した胸を張る夏乃。

「いや、まあ確かにすげえんだけど………そんで？」

視線を固定したまま、夏乃に問いかける。

「？　そんで、って？」

質問が質問で返された。

「いやだから、何か用事があつからここ来たんじゃないのか？　出来れば今日がいいんだけどーとか何とかつつてたし……」  
更に質問で返す。

「……………あ、あれ？　わ、私そんな事言つたっけか？」

「……………」

「いや、あの、その…………」

舌打ちをして、大きなため息をつく。

うるたえる夏乃の様子から、しっかりと思い出しているのは火を見るよりも明らかである。その上でシラを切ろうとしているという事はつまり、だ。

「…………宮下夏乃さん？　わざわざあんなキツツイ坂道上らせてまで俺をここまで連れてきた理由をお聞かせ願おうか？」

夏乃は用事があつたわけではなく、何かしらの目的があつて俺を

いっしょに連れていっしょとしていた、という考えに到る。



## 第5話（5月）～仲直り～

俺達の間に流れる気不味い沈黙。

展望台の手摺を握ってうつむく夏乃の横顔を、何も言わずにじっと見据える。

公園の水銀灯には灯が点もり、俺が通う高校の方から微かにブラスバンド部の合奏が聞こえてくる。

それからどれくらいの時間が流れただろう？

やがて夏乃は意を決したようにこちらに向き直ると、

「……何で佳ちゃん、私のこと避けるようになったの？」

「……は？」

全く想定していなかった質問に心がドクンと跳ね上がるも、内心の動揺を悟られまいと、表面上は平静を装い、質問の意図を図りかねる、とでもいうように眉をひそめる。

「佳ちゃん中学三年生の終わり頃から急に佳ちゃん冷たくなった。

学校で話しかけても無視するし、朝学校に行く時間わざと私とずらしてたし、放課後待ってても、いつも先に帰っちゃってたし……」

「いや、そ、それはその……」

あの日の放課後、お前と誰かが喋っているのを聞いたから、と言った所で何年も前の事を覚えていない可能性の方が高いし、もし仮に夏乃が覚えていたとしても、そんな事を言える筈が無い。

この期に及んで、彼女に自分の恋心を知られてしまう事を避けたと思う、臆病な自分がいた。

俺の仮面はあっさりと砕け、いつの間にか立場は逆転。うるたえる俺に夏乃が更に続ける。

「私すごい悲しかった。私が佳ちゃんの事知らないうちに傷付けたのかもしれないって、そう思った。だから、しつこくくっついたりして、これ以上佳ちゃんに嫌われたくなかったから、私も佳ちゃんと距離置いてたの。いつかは、また昔みたいに戻れると思って」

「い、いや、それは……っ！」

「だから、今日佳ちゃんが私に付き合ってくれてすごく嬉しかったし、安心した。もう私の事許してくれたのかな、って」

違う。お前は何も悪くない。お前が謝る必要なんて全く無いんだ。悪いのは全部俺なんだ。

そう言いたいのに、俺の自分勝手なわがままで、夏乃の心に要らぬ傷をつけ、深く思い悩ませてしまった事を謝りたいのに、声が出てこない。

そんな俺の心の内の想いを知る術の無い夏乃は更に続ける。

「私ね、東京の大学受けようと思ってるの」

「え……？」

東京と言えば、ここから行くだけで、どれだけ安く見積もっても軽く五、六万円はかかる。往復すれば、単純計算で十数万円。

加えて夏乃の父親はこの街に引越して来た時点で既に亡くなっている為、今日まで女手一つでどうにか支えられていた宮下家は、それ程裕福な家庭じゃない。

つまり、もし彼女が大学に合格すれば、少なくとも卒業までの四年間、この町に戻って来れない事意味している。

「私ね、佳ちゃんに嫌われたままこの街とサヨナラしたくない。何て言うか、そんなモヤモヤ残したら、私大学受かって東京行ってもきつと頑張れないと思うから、だから……佳ちゃん、昔みたいにまた私と仲良くしてくれませんか？」

先程までのちゃんぽらんばんな態度とはうって変わって、真剣な表情で俺を見据える夏乃。

その視線が余りに真っ直ぐで、今の俺には受け止める事が出来ず、たまらずに目を逸らした。

「駄目……かな？」

それを拒否されているとつたのか、不安げに問いかけてくる夏乃。

「え、あ、いや、そんな事は……」

「じゃあ仲直りしてくれるの!？」

一瞬で顔がぱあっと輝く。

「あ、ああ……」

俺にはただ頷く事しか出来なかった。

断わりたかったわけじゃない。

俺が織愛を避けるようになった本当の理由を話してもいないのに、謝ってもいないのに夏乃と昔のように仲良くするのは、何と云えばいいのか……とにかく何だか気が引けたのだ。

「ありがと佳ちゃん! それじゃ、はいっ!」

いきなり右手を差し出してくる織愛。

「……?」

「ほらあっ!」

「? だから何だよ?」

「むー……仲直りの握手だよっ!」

「あ? あ、ああ、はいはい」

夏乃は言われるがままに差し出した俺の右手をぎゅっと握り、上下に二回大きく振った。

「はいこれで仲直りっ! これからまたよろしくね!」

えへへー、と満面の笑みを浮かべる夏乃。

その笑顔が昔のイメージと重なり、俺は赤くなった顔を背けた。

結局、そのまま俺は何も言い出す事が出来ずに、夏乃を後ろに乗せて坂を下っていった。

第5話（5月）～仲直り～（後書き）

二人の仲直りもすみ（？）次回から本格的に物語が動き出す……ん  
でしようかね？w

## 第6話（5月）〜いつもと違う朝〜

目を開けると、そこにはいつもと同じ、見慣れた自室の天井があった。

「……………」

俺の頭の上では、携帯電話が「早く起きろ」と言わんばかりに、アップテンポなメロディを大音量で奏で続けている。

のろのろとベッドから手を伸ばし、電源ボタンを押すと、室内は再び静寂に包まれた。

「……………」

紺色のカーテンの細い隙間から朝日が射し込み、その箇所を漂っている埃がきらきらと輝いている、薄暗い部屋の中。

窓の外からは、雀の鳴き声と自動車の排気音、散歩中の犬の鳴き声が時々聞こえてくる。

「……………あと5分だけ」

自分に言い聞かせるように、寝起きでがらがらの声で、小さく呟く。

伸ばした手を布団の中に引っ込め、俺は再び目を閉じた。

……春眠暁を覚えず、という言葉がある。

春の夜は短く、その上眠り心地がいいので明け方になっても中々目が覚めない、という意味だ。

5月といえば、正に春真っ盛りな訳である。

……まあ、つまり何が言いたいのかというと、

「……………ちゃん……………ほら……………きなきや」

あと5分だけなどと言って起きる事が出来ないような意志の弱い人間が、例えば5分眠ったところで起きれる筈はないのだ。

「……………佳ちゃんっ！早く起きなきや遅刻だよ！」

目を開けると、そこには先程と同じく、見慣れた自室の天井……

は無く、俺を見下ろしている夏乃の顔があった。

「……うおわっ！」

慌ててベッドから跳ね起きる。

「全くもう……佳ちゃん寝坊すけなところも相変わらずだね」

制服姿の夏乃が、両手を腰に当て、呆れたような表情を浮かべながら、小さくため息をついた。

「……ってちよつと待て！ 何でお前が俺の部屋にいるんだよ！」

「一緒に学校行こうと思って迎えに来たらおばさんに頼まれたの。佳ちゃんが起きてこないから見てきてくれないかって」

「あんのクソババア……」

「駄目だよ佳ちゃん、お母さんのことそんな風に言っちゃ……それじゃ早く着替えて下りてきてね。急いでよ？」

そう言って夏乃はくると踵を返し、俺の部屋から出て行った。

「……心臓に悪いっての」

いろんな意味で、という続きの言葉はぐつと飲み込む。

俺は断腸の思いで温もり残るベッドから下りて、ハンガーにかけてあった制服に着替えながら、明日以降は絶対、夏乃に起こされる前に起きようと、固く誓ったのだった。

……………

ここで、少し時間を遡る。

昨日、あれから俺達はすぐに公園を後にして、夏乃を宮下家の前まで送ってやったのだった。

「ふいー……到着っ」

「お疲れ様ー。ありがとってかごめんね佳ちゃん」

「全くだつっの……ったく。次こんな事しても送ってっやんねえからな」

「き、肝に命じときます……それじゃ、明日もよろしくねー、ばいばーい」

「おう……ってちよい待て」

余りに会話の流れが自然過ぎて、危うく聞き流すところだった。玄関のドアノブに手をかけた夏乃を慌てて引き止める。

「ん？ どしたの？」

ノブから手を離さずに、首だけこちらを振り返る夏乃。

「いやどしたのじゃなくてよ、何がよろしくなんだよ？」

「え？ だって私、学校に自転車置いてきちゃってるし……明日の朝も送ってもらおっかなーって」

「あ？ ああ……言われてみれば、自転車が壊れたとか何とか言っていたような記憶が無くもないが……」

「んー……まあ実はあれもウソだったりするんだけどね」

しれっと言つてのける夏乃。

「だったらお前、帰り道の途中で自転車拾ってきやよかつたじゃねーか！」

「……あ、そか」

今気付いた、とでも言わんばかりの表情をしているが恐らく、いや絶対、こいつは確信犯だ。

根拠は無いが、俺の第六感がそう訴えていた。

「あ、じゃねえ馬鹿！」

「駄目だよー佳ちゃん、馬鹿って言つた方が馬鹿なん」

「どこの小学生の理屈だそりゃ！？」

「まーまーそんな怒らないでよ。今更気付いてどうこう言つたところで手遅れな訳じゃない？ てなわけで明日よろ」

「断る」

言い終えないうちにばっさりと切り捨てる。

「えーなんでっ！？」

「自業自得だろ。明日は歩いてきやいい。俺は知らん」

そもそも、他校の制服着た女の子と自転車二人乗りで登校だなんて恥ずかし過ぎる。

加えて、万が一クラスメイトの誰かに見られたりでもすればたまったもんじゃないし、北澤か上野に見つかればその時は命に関わる。「佳ちゃん、こんなか弱い女の子に自転車で十分かかる道を歩かせるつもりなの！？ 男としてサイテーだよっ！ おばさんに言いつけちゃうよ！？」

「そこで何でお袋が出てくんだよ……てか歩きたくないならバスでも何でも使えばいいじゃ……って分かった！ 送ってく！ 送ってやるから泣くのはやめろ！」

「えへへーよかったっ！ それじゃまた明日ねっ！ 行つとくけど置いてっちゃんだよ！？」

「へいへい……はあ」



第7話（5月）〜謝る癖は誰のせい？〜

「……つとにこいつにや勝てねえや」

「えー？ 佳ちゃん何か言ったー？」

というわけで今俺は、夏乃を後部座席に乗せ、学校へ向かって自転車のペダルを漕いでいる。

「……誰かさんのせいでいつもよりペダルが重いつつたんだよ！」

「……れでいに対してそんなコト言うのはこの口か！？」

後ろから伸びてきた両手が、何故か口ではなく、俺の首をぎりぎりと絞める。

「ぐおっ！？ ……わ、分かった悪かった！ マジ苦しいから離せ

……！」

「えー？ 風のせいでよく聞こえないです」

「ぐっ……は、離して下さい……！」

「ん、よろしい」

首にかかっていた圧迫が解かれ、俺はむせながら、必死に肺に空気を取り込む。

「あ、そんな苦しかった……？」

心配そうな声色。

どんな表情をしているかなんて、顔を見なくたって分かる。

「げほっ……だからヤバいつつってただろうが馬鹿……！」

それでも「気にしないでいい」なんて気の利いた台詞を、例えば思いついても口には出せない辺り、俺もまだまだ子供らしい。

「う……ご、ごめんなさい」

それきり夏乃は何も言わなくなってしまった。

気まずい沈黙。

喋っていた時には気付かなかったが、周囲から送られてくる、色々な感情の込もった視線がかなり痛い。

つとに扱いづらいつつか何っか。

俺はため息をひとつつき、

「お前昨日から謝ってばっかだな」

「……え？」

「100パーセント自分が悪いんだったら仕方ねえけどな、相手に少しでも非があると思っただんなら、んなほいほい謝んな。鼻で笑って『そんなん自業自得よ』くらいの事言ってみせろや」

自意識過剰な考えかもしれないが、恐らく夏乃はまだ心のどこかで、俺と再び疎遠になってしまう事に怯えている。

だから俺を怒らせたと分かった途端、それ以上の怒りを買わないように、すぐに自分から折れてしまうのだ。

「う、うん……分かった」

夏乃がこんなに臆病になってしまった原因は、全て自分にある。

それならば、その心に出て来た傷を癒すのは、俺の役目なのだろう。

「……分かったんならいい。しっかりつかまってる」

……まあ、多少荒療治になってしまいそうではあるが。

というわけで夏乃の通う高校前に到着。

ホームルーム開始十分前という事もあってか、辺りは登校中の学生で溢れかえっている。

「ありがとね佳ちゃん。それじゃ帰りはコンビニで待ち合わせって事でよろしく」

……一瞬、軽い立ち眩みを覚え、俺は左手を額にあてながら、

「は、はあ？ 何言ってるんだお前？」

「？ だって帰り道で、待ち合わせの場所に丁度良さげな場所って言ったらあそこのコンビニじゃない？」

「い、いや、そういう事じゃな……へいへい分かりました」

反論が意味を成さない事は、昨日嫌というほど学習した。

俺が何を言ったところで、結局「女の涙」という名の最終兵器の前に敗れ去るだけなのだから。

「別に早く終わった方がもう一人の高校の前まで行って待ってるっ

てな感じにしてもいいけど？」

「よしコンビ二だな了解した」

夏乃の言葉から一瞬の間も置かずに返事をする。

昨日は運良くクラスメートに見られず下校出来たが、そうそうラッキーデイが何日も続くわけがない。

しかも夏乃の通っている学校は女子高だ。

その校門の前で自転車に乗った野郎が一人でいれば、警察を呼ばれても文句は言えない。

この年で変質者の濡れ衣を着せられるのだけは勘弁願いたい。

「？ まあいいけど。それじゃまた放課後ねー」

夏乃は笑顔で手を振りながら走り出し、登校ラッシュの女子高生の人波に紛れていった。

「はぁ……」

俺はため息を一つつき、周囲の女子高生達からの好奇の視線に晒されながら、自分が通う高校目指してペダルを漕ぎ出した。

## 第8話（5月）ゝ人の皮を被った鬼ゝ（前書き）

読者数が300名を突破しました。自分のような若輩者の作品を読んで頂けているだけでも、とても嬉しく思います。完結まで精一杯頑張りますので、これからもよろしくお願いします。あと、感想、酷評お待ちしております。どんどん書き込んでやって下さいm（

）m

第8話（5月）く人の皮を被った鬼く

ホームルーム開始五分前の廊下には、何時もと同じように様々な音が混ざりあっている。

遅刻しないようにと走る靴音。

壁越しに聞こえる、机と椅子がぶつかりあう音や、賑やかな話し声。

「すう……」

そんな喧騒の中、俺は「3 C」と書かれたプレートが掲げられている扉の取っ手に右手をかけ、大きく息を吸い込んだ。

どこか埃っぽい、学校特有の空気で、肺が満たされる。

「……はあー」

吸った空気を、ゆっくりと吐き出す。

同じ行動を二度繰り返して、ようやく決心がついた。

右手に力を込める。

滑りの悪い引き戸が、耳障りな音をたてながらスライドした。

.....

何時もと変わらない、朝の教室風景。

数人が俺の方をちらりと見るが、すぐに興味をなくして視線を元に戻し、近くの友人と下らない会話を再開した。

どうやら昨日と今日の事は、誰も知らないらしい。こつそりと安堵のため息をもらす。

……ま、よくよく考えてみりゃ、俺みたいなのが女と二人乗りしてたくらいで、噂になるわきゃねえか。

苦笑しながら一歩足を踏み出した次の瞬間、

「……すけえええええ！」

叫び声と共に背後から衝撃。

予期せぬ攻撃に、俺はたまらずうつ伏せに倒れ込む。

教室にいる生徒の視線が、一斉にこちらに集中してしまい、かなり

恥ずかしい。

犯人の目星は大体ついているので、両腕で上半身を起こしながら後ろを振り返る。

「っ！ 何しやが……る……」

照れ隠しの怒鳴り声は、俺の背後に両腕を組んで立っている男の顔を見て、尻すばみになっていった。

「ふしゅるる……」

人の姿をした鬼が立っていた。

額には天に向かって伸びている一本の太い角。

鋭い牙が生え揃う口の隙間から、白い蒸気が漏れ出ている。

それらの幻覚が、鬼もとい上野の背後からにじみ出ているどす黒い怒りのオーラによるものなのかは定かではない。

「う……あ……」

……あ、やばい俺殺されますか？

高井田佳祐、この世に生を受けて17年とちょっと。

今初めて、命に関わる窮地に立たされた恐怖というものを感じている。

「……佳祐」

かなり声色が低い。

見た目からして言うまでもないかもしれないが、かなり怒っているように見える。

「何でしょ……な、何だよ？」

恐怖に駆られて敬語で返事しようとしたのを堪えたのは、俺に残された最後の意地、というやつだろうか。

それにしてもこの怒りよう……まさか夏乃と一緒にいるのを見られていたのか？ だとしたら本当に命に関わる。

上野は現在まで女ツ気も色気も無い人生を過ごしてきた人間なのだ。

こんな事件がある。

高校2年の十一月も半ばを過ぎた頃のある日。

六限目の英語の授業も残すところ後十数分で、来る放課後の開放感に、教室内が微かに騒がしくなってきた時だった。

教師が黒板に、教科書の英文を書き写している時、それは起こった。

上野がいきなり席から立ち上がり、

「……………おおおおおおあつ！！」

雄叫びと共に、手に持っていた何かの本を真つ二つに引き裂いたのだ。

誰もが予期せぬ（予期出来る筈が無い）事態に、全員が上野の方を見たまま、教室内の時が止まった。

大声に驚いて、俺の手元にあった大学ノートの書きかけの「a」の文字が「q」みたいになってしまっていたのも覚えている。

「うあああああああつ……………！！！！」

上野はほんの数秒前まで本だった紙切れを床に教室の床に渾身の力を込めて叩きつけると、何故か涙を流しながら教室から出て行った。

「……………う、上野、ちょっと待ておい！？」

数秒遅れて教師が後を追いかけていく。

後に残された俺達生徒はただただ困惑するばかり。

とりあえず上野の破り捨てた本に原因があるのではと、床の残骸を拾い上げる。

表紙に書かれていた文字は、

『電　　男』

「……………」

数十分後、上野は教師と共に教室に戻ってきた。

上野は後にこう語っている。

「最初は主人公の事を心の中で応援していたのだが、読み進めているうちに、ラブラブムードが強まっていく主人公とヒロインにムシ

ヤクシヤしてやってしまった。反省はしているが後悔は欠片も無い」

その日の放課後、彼が職員室に呼ばれたのは言っまでも無い。



## 第9話（5月）〜毒舌委員長〜

そんな色々な意味で危険な男に、俺が女子高生と一緒に（しかも自転車二人乗りで）帰っているところを見られた日には小説ジャンルを恋愛からホラー辺りに変更しなきゃならなく……ってちよっと待てよ？

よくよく考えてみると、もし上野に昨日の事がバレているのなら、俺は先程の一撃の時点で保健室（最悪三途の川か綺麗な花畑）に送られているはずだ。

なのに俺はまだ生きている。という事はひょっとして……。

「な、なあ上野……？」

恐る恐る尋ねる。

「ああ？」

「お前……俺が昨日さっさと帰った事に怒ってんのか……？」

「……ったりめーだこのアホナスっ！」

「あ、アホナスっ!？」

……上野の特殊な罵倒はとりあえずさておき、どうやら俺の考えは当たっていたようだ。

危機レベルはかなり下がった。

「さて……それじゃ、昨日俺達に何も言わずにダッシュで帰ってったワケをお聞かせ願おうか？ さぞかし大事な大事な理由があったんだよね？」

軽いデジャヴを感じたが、今はそれどころではない。

まだ危機的な状況から脱出出来たわけではないのだから。

「ち、ちなみに現時点での罪状は……？」

「千六百三十二円の罰金」

中途半端な罰金の額は、俺達三人の行きつけのラーメン屋である『らめん川津』における最高額メニュー『川ちゃんスペシャルセツト』（好きなラーメン、餃子、半チャーハンか焼豚丼を選択可能）

のお値段八百十六円（税込）二人分の値段である事を補足しておく。  
「くっ……」

俺に非があるのなら仕方ないと諦めがつくのだが、理由が理由である。

金欠なのも相俟って、正直一円たりともこいつらに支払いたくはない。

どうしたものかと考えていると、教室の扉のど真ん中に立ち、腕を組んで俺を見下ろす上野の背後から、

「……いい加減どきなさい」

静かで冷たい声。

声に温度があるなら、きっと絶対零度に達しているだろう。

「ぐえっ！」

蛙が潰れるような悲鳴と共に、上野が俺の方に倒れこんできた。

野郎と抱き合うのは避けたいので、とっさに横に転がり回避。

うん、我ながらナイス判断。

上野は先程の俺と同じように、うつぶせに床に倒れこんだ。

靴跡が制服の背中にくつきりとプリントされている。

「な、何すんだよ委員長っ！」

がばつと起き上がった上野に代わってドアの真ん中に立ち、通学鞆を右肩に背負い、左手を腰にあてながら無表情で俺達を見下ろしているのは、俺達のクラスのクラス委員長である美月伊空。みつきいそら

つり眼にノンフレームの眼鏡。

セミロングの黒髪を後ろで一つに束ねている。

今時珍しい化粧つぎゼロのその顔から、表情らしきものは読み取れない。

「あなたが馬鹿なのは知ってたけど、こんなトコに立ってたら入ってくる人の邪魔になるって事も分かんないくらい馬鹿だったの？」

眉一つ動かさずに、美月が強烈な毒を吐く。

ちなみに、トラウマになりかねない程の毒舌を駆使して相手を言い負かす事を得意とする美月と、腕っ節は強いが口はめっぼう弱い

上野は、犬猿の仲である。

「っせえなっ！ だからって蹴る事無えだろがっ！」  
その意見には全く賛成だ。

ついでに数分前の自分の行動を少し省みてくれれば言う事は何も無い。

「声かけたのに無視してたあなたが悪いのよ」

「う、嘘吐け！ そんなん聞こえなかったぞっ！？」

「聞いてなかったの間違いじゃないの？ ま、どっちでもいいけど。  
馬鹿な上に耳まで遠いなんて、ホント可哀想な人ね」

そう言つて無表情のまま、わざとらしいため息を吐く美月。

「人のことを馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿つてこの野」

「はい無駄話はここまで。 もうホームルーム始まるんだから、いつまでも寝そべってないでさっさと席に座った方がいいんじゃない？」  
そう言つて美月は自分の席へとすたすた歩いていった。

「委員長め……いつか必ず殺してやる」

物騒な台詞を呟きながら立ち上がり、埃を払いながら自分の席につく上野。

怒りの余りどうやら罰金云々の事は忘れたいらしい。

美月に感謝しなきゃな、と思いながら立ち上がる。 と、美月がこちらを振り返り、

「あ、そうそう高井田君、ちょっと質問なんだけど」

「あ？ なんだよ？」

上野が振り向く。 何だか嫌な予感が……。

「昨日女の子と一緒に帰ってなかった？ 二人乗りしながら」

んー……とりあえず、前言は撤回しておこう、うん。

第9話（5月）～毒舌委員長～（後書き）

自分で言うのもなんですが……ノリが恋愛ってかコメディになって  
きてる気がしますね（汗）

## 第10話（5月）〜味方が敵に変わる瞬間〜

背後に気を配りながら自転車を走らせる事約5分。

夏乃が待ち合わせ場所に指定したコンビニの青い看板が見えてきた。

俺達の住んでいる町が田舎だからというのが関係しているのかどうかは分からないが、このコンビニ、お客と言えば学校帰りの学生が雑誌の立ち読みに来るくらいなもので、人通りも車通りも少ないのだが、何故か駐車場が無駄に広い。

その広さゆえか、午後十一時を過ぎる頃には、特攻服に身を包んだ方々の溜まり場と化しているらしく、その証拠にアスファルトには、幾筋ものバイクのものらしきタイヤの跡が刻まれている。

「……………っ!？」

何となく視線を感じ、駐車場手前で自転車を一旦停止させて素早く背後を振り返る。

こちらを見つめていた野良猫が、なあ、と一声鳴いて道路を横切っていく。人の気配は無い。

……傍から見りゃ俺は頭のおかしい奴なんだろうなあ。

第三者的な意見が頭をよぎるが、他者の視線などに構っている場合ではないのだ。

気分的にはどこぞの暗殺者に絶えず命を狙われ続けている男、といった感じだろうか。

まあ、危険の度合ではそう大差無いような気はするが。

駐車場の真ん中を走り、コンビニへ。

いちいち辺りを見回すまでもなく、夏乃の姿は店内に見付ける事が出来た。

ガラス越しに何かの雑誌を立ち読みしているのは確認出来るのだが、そのタイトルはマガジンラックに隠れて見えない。

余程熱中しているのか、俺の到着には気付いていないらしい。ガラスを叩く、という手もあったのだが、店内には数人の客がいるので何となく気恥ずかしいものがある。

仕方ないので、俺は夏乃を呼びにコンビニの自動ドアをくぐった。「いらつしゃいませー」

やる気を感じられないアルバイト店員の声に、ようやく夏乃が紙面から顔を上げた。

「あ、佳ちゃんお疲れ様ー……ってどうかしたの？ 何かすつごく疲れたような顔してるけど」

「……………何でもねえよ」

お前のせいだ、と喉まで出かけた言葉は、ぐつと飲み込んだ。

夏乃だって悪気があつてやった訳じゃないのだ。全てをこいつ一人の責任にするのは余りにも酷だ……と、頭では分かっている。

それでも、今日一日の出来事を考えると、どうしても素直に許そうという気にはなれないのだ。

……………

美月の余計な一言の後、すぐにクラス担任が教室に入ってきて、不穏な空気のままホームルームが始まった。

「……………はいそれじゃここまで」

「きりーっ、ちゅーもーく、れー」

クラス担任が教室を出て行ったのを見届けて、俺は椅子から立ち上がろうとしたのだが、上野に両肩をがっちりと掴まれ、逃亡は阻

止された。

「けーいすつけくうんっ。どーこーにいつくのーかなあっ?」

とても優しい猫撫で声が聞こえる。怖くて振り返れない。

そうしている間に、俺の両肩にぎりぎり力が込められていく。

「い、いや、ちよつとトイレに行こうかなーと……」

「そんな事より先にしなきゃいけない事があると思うんだよねー俺」

「い、いや、やっぱ人間、排泄欲を優先させるべきかなーと思痛い痛い痛い! 北澤助けて北澤!」

前の席の北澤に助けを求める。

北澤は上野と違って大人だから、昨日俺が何も言わずに帰ったからといって別に気にしてない筈だ。

「おうどした」

「肩がっ! 肩が砕けるっ! どうにかしてっ」

北澤は悲鳴に近い声で叫ぶ俺と、その後ろで俺の方を握りつぶそうとしている鬼もとい上野の姿を見て小さなため息をつき、

「……なあ上野」

「ああ!??」

「お前が怒ってる理由もまあ分からは無い。だけど佳祐にだって色々事情があんだろ? 友達だったらそこんとこ考えてやれ。ラーメン屋なんてまた今度行けばいいじゃんか?」

さすがは北澤。見事なまでの正論だ。

これで尋問から開放される……と思ったのだが。

「……なあ北澤」

「何だ?」

「お前その用事が女関係である可能性が浮上してきていると知った上で、それでも同じ事言えんのか?」

「そのまま握りつぶせ」

「了解した」

「ああああああああああああっ!? ヤバイッテマジヤバイッテ!!」

## 第11話（5月）～夏乃の進学大作戦？～

その後、一時限目の英語が担当教諭の遅刻によって自習になるという予想だにしない事態が発生。

俺はたつぷり五十分間、上野、北澤、そして何故か途中から参加してきた美月の三人から、ほとんど拷問に近い尋問を受ける事となったわけだが……いや、もうこれ以上は思い出したくない。

一つだけ言えるのは、頭脳派の美空と肉体派の上野が手を組むと大変な事が起きることだけだ。

結果だけ言つと「美月が見かけた人物は只の人違いであり、昨日俺は母親から『実家の祖母が倒れた』という連絡をもらい、急いで祖母が搬送された病院に向かった。というわけで暫くの間、母親は祖母の身の回りの世話をしなければならなくなったので、寄り道をせずにまっすぐ帰る事になる」という言い訳で、三人はとりあえず納得した。

言うまでも無いとは思うが、祖母はぴんぴんしている。

「佳ちゃん？ おーい？」

「……あ？ ああ……悪い」

「ホントに大丈夫？」

心配そうな表情で俺の顔を覗きこむ夏乃。

「だから大丈夫だっての……あんま気にすんな。そっぴやお前、今何読んでんだ？ ずいぶんと読みふけてたみたいだったな？」

あまり心配してくるもんだから思わずぼろろと本音が出てしまった、なんて事になったら厄介だ。

間接的にであれ、俺が疲れている原因が自分にあると知れば、今のこいつはきつと気に病んでしまうだろうから。

とっさに俺は無理矢理話題をそらした。

「あ、うん。昨日テレビで予告やってた映画が面白そうだったから、



どんなお話なのかちよつち調べてたの」

「そか……そんで見つかったのか？」

「うん。たつたさつき読み終わったよ。佳ちゃんも何か買い物とか立ち読みしてく？」

「いや、別に。漫画雑誌なんてしばらく読んでねえし。欲しいものもねえし」

そもそも金が無えし、というのはここで言っても意味が無いので口には出さなかった。

「あれ？ 漫画卒業したの？ 何か昔の佳ちゃんからは想像出来ないなあ……そう言えば佳ちゃんが漫画読んでる時つてちつとも私に構ってくれなかったよね」

と言つて悪戯っぽく微笑む夏乃。

その頃の事は俺も覚えてる。

いつもしまいには夏乃がぐずりだして、その度に仕方なく遊んでやっていたものだ。

まあ、今は別に漫画に対する興味が全くなつたわけではない。昔と違つて、さほどのめりこめなくなつただけだ。

熱が冷めた、とでも言えはいんだろつか？

「いつの話を持ち出してきてんだよお前……おら、用事済んだならさつさと帰つぞ」

「ん、そだね」

「ありがとーございましたー」

接客態度のなっていないアルバイト君の声に見送られ、俺達は人影まばらなコンビニを後にした。

………

「……そう言えばさ、佳ちゃんは進路どうするの？」  
家を目指してペダルをこいでいる途中の事。

コンビ二を後にして数分も経たないうちに、隣を走る夏乃が不意に切り出した。

「な、なんだよいきなり……」

「いーじゃん気になったんだからさ。それで？ どうするの？」

「あー……いや、まだ何も考えてねえや」

「考えてないって……佳ちゃん今何月だか分かってる？」

「お前俺を馬鹿にしてんのか？ 五月に決まってるんだろ？」

「そーだよもう五月なんだよっ！？」

「うおっ！？」

突然の大声に驚き、思わずハンドルが揺れた。

慌ててバランスを建て直し、方向を修正する

「……い、いきなり大声出すなよビビンだろうが！」

「あ……ご、ごめんなさ」

「だからそうほいほい謝んなっつただろ……」

「ごっ、ごめんなさい……あ」

「……もついい。そんで？ もう五月だからどうしたって？」

「あつとね……いい、佳ちゃん？ 今は三年の五月だよな？ しかも今日は二十三日。もうそろそろ六月に入ろうかってとこだね」

「ああ。そんで？」

「単純計算、卒業まで残り一年を切っちゃってるんだよ？ 進学するにしても卒業するにしても、今からしっかり計画立てとかないと後から後悔するのは結局自分だよ？」

まあ、自分一人だけでも大変なはずなのに、他人の俺の進路まで夏乃の気持ちはとても嬉しいのだが……。

「んな事言われてもなあ……」

「私的な意見としては進学した方がいいと思うけど……」

「ふーん、進学ねえ……」

「何か佳ちゃんになりたいものとかないの？」

「……ねえな。てか俺、そもそも進学できるような成績じゃねえし」

「将来の夢は？」と聞かれたら「長生き」としか答えられなさそう  
だ。

典型的な無気力現代人、というやつなのかもしれない。

更に言えば俺は勉強というものが嫌いだ。

定期試験は基本的に一夜漬けである。

テストにおいて「どれだけいい点を取れるか」などと考えた事は  
ない。

いつも頭に浮かぶのは「赤点を取るか取らないか」という事だけ。  
そんな考えを持っているせいか、毎回毎回テストの順位は下から  
数える方が早い。

難しい顔をして何事かを考え込む夏乃。

数秒の沈黙の後、ぱつ、と勢い良くこちらを振り向くと、

「よし！ 佳ちゃん勉強しよう！」

「……はあ？」

「どの大学に行くにしたって成績は大事だからね！ 進学先は勉強  
しながら考えよう！ 好きな科目とか得意科目とかから進路考える  
のもいいと思うんだよねー」

満面の笑顔を浮かべながら、うんうん、と頷く夏乃。

俺を置いて話はどんどん先へ進んでいく。

「あー……いや、ちょっと」

「勉強は私が教えたげるから心配しないで！ 私にどーんと任せな  
さいっ！」

「あ、ああ……」

……つてやつべ！

思わず返事をしてしまった。

言ってから後悔するが時既に遅し。

後悔先に立たず。

気付けば俺達の家のすぐそこまで来ていた。

「よーし！　そうと決まれば今晚から始めよう！　用意出来たら佳ちゃん家に行くから待っててね！　それじゃバイバーイ！」

俺に断る暇すら与えずに一方的にまくし立てると、夏乃はスピードを上げてさつさと家の敷地内に入ってしまった。

「……………」

一人取り残された俺は、ただ呆然とするしかなかった。

第11話（5月）～夏乃の進学大作戦？～（後書き）

これを読んでいる高校生の読者サマへ。

今回夏乃の言っている通り、進路の事ってのは早いうちから考えとくに越した事はありません。皆様はくれぐれも佳祐のようにはならないように（笑）

以上、反面教師からのアドバイスでした。

## 第12話（6月）～眠気のワケは～

朝のホーームルームが终れば、一時限目開始時間までの約十分間は生徒達の雑談時間となる。

授業の合間にある休み時間というのは本来、次の時限の準備、予習時間なのだろうが、ともに予習している奴などごく限られている（と言うか恐らくいない）し、授業の準備など担当教諭が教室に入ってきてからでも十分間に合う。

という訳で俺達いつもの三人組も他の生徒の例に漏れず、下らない雑談に華を咲かせていたのだが……。

「ふあああああ……」

噛み殺したものも含めれば、本日三十数回目となる欠伸が出た。少しアバウトなのは三十回目の時点で数えるのを止めたからである。

「うつわでっけー欠伸。のどち　こ丸見えだったぜ今？」

俺の机の上に座っている上野が馬鹿みたいに笑う。

んなでかい声でち○こなんて言うなつての……周りに勘違いされんだろ。

いつもの俺なら一発くらい頭をひっぱたいてやるのだろうが、そんな事を一瞬でどうでもよくさせる程に今は眠い。

「口くらい手で隠せよ佳祐……」

呆れた表情を浮かべ、ため息混じりに咎める北澤。

「おー……悪い……」

返事をする事すらも億劫である。

本当は机に突っ伏したいところなのだが、今机の上には上野が座っている。

野郎の尻の隣で眠りにつくのは傍から見てもよろしくない。

と言うか俺としてもよろしくない。

かと言って上野を退かせる気力もない。

どうしたものかと考えているうちに、体が椅子からずりずりとずり落ち、背もたれに首が引つかかって止まった。

煤けた天井を見上げて小さなうめき声を漏らす様は、傍からは死体にも見えるのではないだろうか。

「何だ何だどうした佳祐え？ あ、ひよつとしてあれか？ 夜な夜な家族に隠れてAV観てるせいで毎日寝不足気味ってやつかぁ？ んん？」

「午前中からよくそんな下品な冗談ばんぽんと思いつくわね。ホント感心するわ。見習いたいとは思わないけど」

何時の間にか上野の後ろに立っていた美空がため息混じりに毒を吐く。

本当に神出鬼没だ。

「うおっ！ な、何盗み聞きしてんだよ委員長！？」

「盗み聞きしたんじゃないわ。あなたの声が馬鹿みたいに大きいから嫌でも聞こえてきただけよ」

「ば、馬鹿だとこのっ……何か用があんならさつさと言えよな！」

「あら、用が無くちゃ会話に入っちゃいけないの？ まああつたところであなたにわざわざ話す義務も無いわよね？」

「ぐ……ほんつと可愛げがねえ……」

「生憎あなたみたいな人に振り撒く程、愛想つてものを持ちあわせでないの。ごめんなさいね」

顔は相変わらずの無表情。

言葉の意に反して、その声色からも、申し訳なさの欠片も感じとる事は出来ない。

「……あの二人は放つとくとしてだ。何かあつたのか佳祐？」

口論する二人（性格には美空に噛みつく上野と、それを軽くあしらっている美空）を横目で見ながら、北澤が改めて問いかけてきた。

「ん？ ああ……最近ちょつと勉強つてのをしてよ。そのせいだ」  
「勉強つて……お前がか？ 面白くもない冗談だなおい」

苦笑する北澤。

酷い言われようではあるが、自分が今まで、冗談だと思われても仕方ないような行動をとってきたという自覚があるので、腹は立たない。

「いや、冗談でもなんでもなくて本当にだな……」

「あー分かった分かった。要するに話したくない事情でもあるんだろ？ 聞かんどういてやるよ」

俺の言葉を遮った北澤はそう結論付け、前に向き直った。  
タイミングよく授業開始を告げるベルが鳴る。

ま、信じてもらえるとは思ってなかったし、勘違いさせたままでいいか。

一限目の担当教諭が教室のドアを開けて中に入ってきた。  
美月の号令で皆が立ち上がり、教師が教卓に出席簿を置いたところで礼をする。

着席した瞬間に俺は机に突っ伏し、そのまま眠りの世界へと旅立っていった。



## 第12話（6月）～眠気のワケは～（後書き）

評価を見て、尋常じゃない点数の変動にびっくりしたら、評価基準が変わったそうで……安心したようながっかりしたような（汗）  
酷評でも構いませんので、読んだままの感想を残していただけると、モチベーションもあがりますので、出来ればよろしく願いしますw

### 第13話（6月）デートのお誘い？

「んーっと……はい正解。じゃあ次いつてみよー」

「……今やってるよ」

遠くのスピーカーから窓越しに聞こえるチャイムのメロディ音が、現在時刻は二十一時である事を知らせてくれた。

宮下家の居間の卓袱台に、俺と夏乃は向かい合って座っている。

俺の前には、開いた状態で重ねられた数冊の数学参考書。

左手に中三からの付き合いであるシャープペンを握り、黙々と問題を解く。

夏乃は赤ペン片手に身を乗り出して俺の手元を覗き込み、一問解く毎に採点をする。

「……………」

「……………」

「……あ、そこ間違ってる」

「あ？ どこだよ？」

「ほらこー」

「…………？ 合ってんじゃねえのか？」

「うっん。公式は合ってるけど計算間違ってる」

「んなわけね……………ああ」

赤ペンで指された箇所を消しゴムで消し、修正する。

「佳ちゃん計算間違いないくせば結構いいトコいけるとおもっただけどなー……………あ、ごめんごめん。続きやっちゃって下さい」

「あいよ」

「……………」

「……………」

「…………佳ちゃん風邪ひいてるの？」

「何で」

「なんか耳が真っ赤だから」

「ああ……いや、別に……」

「ホントに？」

「だ、大丈夫だよ。いいから集中させろっつての」

「あ、ごめん」

「……………」

「……………」

「……なあ夏乃？」

意を決して顔を上げた瞬間、頭をがしりと掴まれ、

「顔上げない。集中しなさいしゅーちゅー」

そのままぐいつと押し戻された。

「い、いや、その前にだな……普通こーゆーのって、ある程度問題解いてから採点すんじゃないかねえか？」

頭を抑えつけられながら抗議する。

本当のところ、距離が近過ぎるせいで、髪の毛から時折香るシャンプーの匂いとか、時折シャツの隙間から覗く胸元にドキドキして集中出来ないから、なんて余計な事は言わないでおく。

計算ミスが多い理由もその辺りから来ているのだろう。

「それは駄目なのです」

「何だよ？」

「そしたら私が暇になってしまふのです」

「あ、そすか……」

もう何も言うまい。

抗議は諦め、夏乃のことを意識しないよう努めながら、俺は再び目の前の問題に取りかかり始めた。

まあわざわざ説明するまでもないとは思うが、あの日以来、俺は毎晩夏乃に（半ば強制的に）勉強を教えてもらいに来ている。

別に俺の家でやってもいいのだが、俺の部屋は客を迎えられるような状態ではないし、それ以外の部屋でやるとお袋が差し入れと称

して冷やかしに来る。

というわけで母親が夜遅くまで帰ってこない宮下家の居間が、勉強会場となったわけである。

ちなみに土日はほぼ丸一日、図書館の閲覧室で過ごす事になっている。

好きな女の子の家に来てるってのに、色っぽい事情なんてものは欠片もない。

……と言うか、よくよく考えてみれば、俺は夏乃に異性として見られてないんじゃないだろうか？

女性経験など皆無な俺だが、男女関係無く、普通なら異性と認識している人間を、いきなり親のいない自分の家に招待しないと思う。

「……はあ」

そんなことを考えていたら、自然とため息が洩れた。

「ん？ 佳ちゃんそろそろ疲れちった？」

夏乃が首を動かさずに、上目遣いで俺を見る。

「あ、いや……」

否定しようとして、ふと考える。

夕食を食べ、いつものようにお袋に冷やかされながらここに来たのが確か十八時頃だから……気がつけば三時間も俺はこうやって勉強していた事になる。ここいらでそろそろ休憩を入れてもいいだろう。

「ああ、流石に少し疲れた」

「ん。そいじゃ今やつてる問題出来たらちよつと休憩しよう？ 私も

そろそろ一息つかっかなーって思ってたし。さーがんばろ

ー」

「あいよー」

.....

「ねーねー、そーいえば佳ちゃんどこって期末試験いつから？」

十五分間の休憩タイムに入った。

「何かお腹空いたかもー」と呟いて台所の方で何やらごそごそとやり始めた夏乃が、唐突にそう切り出した。

「あーっと……七月の十三だったか十七だったか……大体七月の真ん中辺りつてのは確実だな」

「十三と十七って……佳ちゃんアバウト過ぎだよ……」  
顔を見なくても声色で呆れているのが分かる。

「っせえな……明日調べてくっからそれでいいだろ？ で？ テスト日程がどうかしたのかよ？」

「ああ、うん、えとね、テスト終わったら一緒に映画見に行かないかなーと思って」

そそそそれぁデートって奴じゃねえのか！？

「……いきなりだなおい。何かあんのか？」

俺の理性を総動員して表面上は平静を保っているが、本当なら小躍りして喜ぶたいくらいだ。

「この前話した面白そうな映画って覚えてる？」

「あー……コンビニで調べてたやつか？」

「うんそれそれ。でね、その映画、七月の三日から公開なんだって流石にテスト一ヶ月前切って映画なんて観に行けないじゃない？ だからテスト明けに自分へのご褒美にっと思ってさ」

「別に俺じゃなくてもいいわけだろ？ 友達とでも行けばいい」  
言うまでもないが、本当なら今すぐにでも飛びつきたいのだ。

だが俺は、それが出来るほど真っ直ぐな性格をしてはいない。  
「それもアリんだけどね。七恵は怖い嫌いだから行きたくないんだって。あ、七恵つてのは私の友達ね」

「……お前ホラーもの好きだったっけ？」

「最近のマイブームなんです」

ちなみに俺は苦手だったりする。

しかし夏乃とのデート？ は捨てがたい……。

「ほら行こーよー？ こんな可愛いオンナノコとでーと出来るんだよー？」

「ばっ……何がデートだ何が！」

「えへへーおにーさん顔真っ赤ですぜー？」

「うっ、うるせえ馬鹿っ！」

……とまあそんなこんなで、俺は結局、夏乃の映画に（仕方なく）付き合う事となったのだった。

………

「どうでもいいけどお前、夜にんなもん食ってつとニキビ出来っぞ？」

台所から戻ってきた夏乃の手にはチョコスナック菓子の箱が握られていた。封は既に切られ、既に口に一つ程放り込まれているらしい。

「う……し、仕方ないじゃないお腹空いたんだから！ ほ、ほらきゅーけー終わりっ！ 卓袱台戻って！」

「ああ！？ まだ十分も経ってね」

「いーから戻りなさい！」

「お、おう……」

## 第14話（6月）～占いと現実と～（前書き）

テスト勉強のせいで更新が遅れていますが、もう少し辛抱してや  
ってください（汗）

あと、もうご存知の方もいらっしゃると思いますが、短編恋愛  
小説『不器用な僕の彼女』を掲載しました。一言で表すんなら遠距  
離恋愛ものです。そちらの方も読んで頂ければ幸いです。

## 第14話（6月）～占いと現実と～

六月も終わりに近付き、期末試験まで残すところ一ヶ月を切ったある日の朝の事。

『今日の占いカウントダウンハイパーッ！』

朝っぱらからやけに元気一杯な女性アナウンサーのタイトルコール。

説明するまでも無いと思うが、その日の星座ごとの運勢を、カウントダウン（一位から発表していくから、正確にはカウントアップなのかもしれない）形式で紹介していくコーナーだ。

未だ覚醒しきっていない頭で、朝食であるトーストにかじりついていた俺は、何気なく窓の外に向けていた視線を、居間のテレビの方に移動させた。

別に占いなんてもんを心の底から信じているわけじゃないが、自分の星座が一位だったりと、本当にその日が良い日になりそうな気がするし、その逆もまた然り。

まあ一言で片付けてしまえば気分の問題だ。

ちなみにどの辺りが『ハイパー』なのか、そもそもいつから『ハイパー』なんて単語がついていたのかは、このニュース番組を小学生の頃から見ている俺にも良く分からない。

『今日の一位はーっ……さそり座のあなた！』

ちなみに俺の星座は正にそのさそり座だったりする。

頬杖をつきながら、心の中で小さくガッツポーズ。

『意中の相手と急接近の予感！今日は積極的にアプローチしちゃいましょう！そんなさそり座のラッキーアイテムは……』

ラッキーアイテムの辺りまでくるともうどうでもいいので、軽く



聞き流す。

それにしても……。

「急接近か……」

小さく呟く。

今日ばかりは現実になつてくれねえかな、なんて調子のいい事を考えていると、

「意中の相手ねえ……どうせあんた夏乃ちゃんの事考えてたでしょ？」

俺の心中を見透かしたような突然の言葉に、不意打ちという事もあつて思わずびくりと体が反応してしまった。

「……っせえぞお袋！ 寝言は寝てから言えっ！」

恥ずかしさに耐えられずに怒鳴りながら振り返ると、台所の流し場で食器を洗っていたはずのお袋が、いつの間にか俺の後ろに立ってテレビ画面を見つめていた。

「あら、違うの！」

「つたりめえだろっ！ 誰があんな……！」

夏乃に聞かれていたら怒られそうな台詞だが、幸いと言うか何と言うか、まだ夏乃は迎えに来ていない。

この時間になつても来ないのは珍しいと言えば珍しいのだが、あいつが寝坊するとは考えにくいので、あまり気にしないでおく。

「なあんだ。あんたと結婚させてうちのお嫁さんにしようと思つたのに残念」

「かつ、勝手に俺の人生決めてんじゃねえよ！」

「あらそう。お母さんは夏乃ちゃん可愛いと思うけどね……ま、あの子はあんたみたいなのには勿体無いかね」

「……言ってる馬鹿」

吐き捨てるようにそう言って、俺は鞆を背負って椅子から立ち上がった。

自分でも分かつてはいるのだ。俺なんかじゃ夏乃と釣り合わない事くらい。

それでも……それでも好きなもんは好きなんだからどうしようもないじゃないか。

………

「ごめん佳ちゃん……私今日学校休まして頂きますです……」

宮下家の玄関。

寝癖で髪の毛をぼさぼさにしたパジャマ姿の夏乃が、けほけほと軽い咳をしながら言った。

「いや、まあそりゃ別に構わねえんだが……大丈夫か？」

「ん……全然大した事無いんだけどね。大事をとって、ってやつ？」  
糸で吊られた人形のように体をゆっくりと左右に動かしながら、蒼白を通り越して真っ白な顔で力無く笑う夏乃。

明らかに強がってるのが分かる。

まあ、真面目なこいつが学校休むってんだから、かなり辛いんだろ。

一応、夏乃の額に手をあてがってみると、

「……うちっ！」

予想外の温度に、反射的に手が離れた。

「おまつ……絶対病院行った方がいいぞ？」

「んー……そかな……？ 全然大した事無いと思うけど……」

「小母さんは？」

「んーと……週明けまでは帰って来れないって」

小母さん　つまり夏乃の母親は、何の仕事をしているのかしら

ないが、昔から滅多に家に帰って来ない。

「小母さん呼ぼうぜ。お前一人だけじゃ病院行けねえだろ」

「多分携帯繋がらないし……てか出来れば呼びたくないかな……」

「こんな時にお前は何を……」

「お母さん私のために頑張ってくれてるから……これ以上迷惑かけたくないんだ」

控えめだけど、芯のある一言。

俺が何を言っただってこいつは自分の意見を曲げたりしないだろう。しかし……小母さんと呼ばないとなると残る選択肢は……。

「しゃーねえ……俺も今日学校」

「休んじや駄目」

きつぱりと言われた。

ちよつとシヨックだったりするも、

「いや、んな事言っただってお前、だったらどうやって病院行くんだよ?」

一応、しつこく食い下がってみた。

頭の中で先程の占いの結果がリピート再生されている。

積極的なアプローチ……積極的なアプローチ……積極的なアプローチ……。

「だーから。私は大丈夫なのです。こんな風邪寝てれば治るので。だからほらさっさと学校行った行っただ！急がないと遅刻しちゃうぞ!」

「ちよつ……待てよ!」

夏乃にぐいぐいと押され、俺は半ば無理矢理玄関の外まで追い出された。

ばたりとドアが閉まる。

「ったく……人が心配してやってるつてのに馬鹿が……」

悪態を吐くも、このまま引き下がるのは俺の精神にも、夏乃の病状にもよろしくない。

宮下家の前で悩む事数十秒。

答えは意外と近くにあった。

門の前に停めておいた自転車はそのままに、俺の家まで引き返す。

「おーいお袋ー！」

靴を脱ぐのは面倒なので、玄関から大声で呼びかける。

「あら、もう学校終わったの？ 随分と早かったわね？」

「つまらねえ冗談言ってるじゃねえよ。夏乃が調子悪いから学校休むって言うてつからよ、後でもいいから病院連れてってやってくんねえか？ かなり熱あるみてえだし」

「あらホントに？ 心配だわねえ……分かった。後で様子見に行くからあんたは早く学校行きなさい」

これで一安心だ。

お袋は夏乃の家庭事情も知っているから、あれこれと世話を焼いてくれるだろう。

「おう、頼むわ」

.....

学校へ向かう途中。

いつもは気付かなかったが、こうして久々に一人で登校すると、何だか寂しいものがある。黙々と自転車のペダルをこぎ続けながら、

「はあ……」

やっぱ占いなんて当たんねえんだろうな……。

俺はため息を吐いた。

## 第14話（6月）～占いと現実と～（後書き）

コメントを下さった方々へこの場を借りてお礼を言わせて頂きます。皆さんの応援が作者の創作意欲を刺激します。いや、まあ無くても最後まで書き続けていくつもりではいますけどねwとにかく、批評、感想など、思い付いた事はどんどん書き込んで頂けると嬉しいです。

## 第15話（6月）幼馴染と優しさ（前書き）

気が付けば「前へ」のアクセス数が1000名を突破&「僕の」のアクセス数が200名を突破しておりました。訪問してくださった皆様に感謝の意を示すと共に、今後どうか佳祐達の恋模様をのんびりと見守ってやって下さるよう、お願い申し上げます。

などと堅ッ苦しい前置きになりましたが、要はこれからもよろしくお願いしますという事でwww

## 第15話（6月）幼馴染と優しさ

「……つとに占いなんてのは信じらんねえな……つと」

苛立ち交じりに呟き、俺は焼却炉にゴミ箱の口を突っ込んだ。

仮にあの占いが本物だというなら、学校に遅刻して教師に怒られ、高熱で苦しんでいる幼馴染の容態を心配していたら教師に授業に集中しろと怒られた後に立たされ、それでもどうか一日の授業を終えてさあとつとと帰ろうと思ったところで今週は掃除当番である事を思い出し、拳句の果てにゴミ捨て当番を決めるじゃんけんに負けてしまうような人間の星座がランキング一位にならないだろう。

行きよりも軽くなったゴミ箱を小脇に抱え、部活が始まっている事などお構い無しにグラウンドのど真ん中を横断していく。

俺達三年生の教室は校舎の最上階である四階にあり、更に言えば焼却炉のある場所はグラウンドを越えた先にある体育館の裏だ。

そんな遙か彼方の地まで、メリツトが無いのに自ら進んで行こうとする聖者みたいな奴など、この高校内（少なくとも今日の掃除当番の中）に存在するはずも無い。

だからと言って誰かが捨てに行かなければ、翌日にはゴミ箱からゴミがあふれ出し、翌日、掃除当番が更なる苦労を強いられる事になるのは火を見るより明らかであり、仕方が無いからじゃんけんで公平に、一人生贄を決めよう、という結果になる。

この校舎を設計した人物は、ここで日常生活を過ごす人間の事を考慮に入れていなかったのだろうかと考えながら昇降口のドアを開ける。

「やーやー負け犬の佳祐君ゴミ捨てご苦労！」

俺達のクラスに割り当てられた下駄箱の前で上野が偉そうに腕を組んで立っていた。

「……せいっ！」

何だかその態度が癪に障ったので、無言でつかつかと歩み寄り、左脇に抱えていたゴミ箱を居合い斬りの要領で、上野の側頭部に叩きつける。

「ふ、ふぐおつ！？」

上手い具合にゴミ箱の角が当たり、上野の上半身が振り抜いたゴミ箱と共に左へ傾く。その先には下駄箱の角が。

結果として上野は鉄製の下駄箱とゴミ箱にサンドイッチされる事となった。その場に蹲った上野の頭頂部に容赦無くゴミ箱を振り下ろす。

..... ! ! ! ! !

もはや悲鳴も出ないらしく、床をごろごろとのた打ち回る上野を  
敢えて踏んづけながら、俺は昇降口を後にした。

.....

上野をボツコボコにした事で少し気分が晴れ、軽い足取りで階段を二段飛ばしで駆け上がった俺の足は、二階と三階の中間に位置する踊り場で停止する事を余儀なくされた。

.....

「ふつ…ん」

明らかに重量過多、といった感じの大きなダンボールを抱えた美月が、ふらふらと階段を登っていたのだから。

.....

……ここで俺に提示されている選択肢は二つ。



一、助ける。

二、見て見ぬ振りをして避けて通る。

いつもの自分だったら迷わず前者を選ぶのだろう。しかし今日はそれを躊躇わせる要因がある。これ以上帰りを長引かせるような事はしたくないのだ。

だからつつつて。

そう。だからといってか弱い女の子が目の前であんな重そうな段ボール箱を持っているのを見過ごしていいはずがない。しかも決して他人と言えるほどの間柄では無いのだから尚更である。

「……………っ!？」

どうしようか俺が迷っているうちに、三階まであと数歩といった所で美月がバランスを崩した。体がゆっくりとこちらに傾いてくる。「!?!? ……っだあくそっ!」

身体は反射的に動いた。ゴミ箱を投げ捨てて階段を駆け上がり、両手を伸ばす。

がらんがらん、と音を立ててゴミ箱が下の階へ転がっていく。そして俺の腕は、

「……………お前ってこーゆー時でも無表情なのな」

「高井田、君……………?」

美月をしつかりとキャッチ出来ていた。ぎりぎりセーフ、といったところだろうか。自分が危ない状況でも腕の中の段ボール箱を手放していないのは流石だとは思っただが、

「……………わ、悪い美月、とりあえずさっさと体勢立て直すかその箱降ろすかどっちかしてくれ」

美月の体重と段ボール箱の重量を支えているのでかなり腰と背中に負荷がかかっている。というかそれ以前に俺が美月を後ろから抱きしめるような格好になってしまっており、かなり恥ずかしい。

「あ、ご、ごめんなさい……」

美月は慌てた様子で俺から離れ、腕の中の箱を床に下ろす。表情は相変わらず変化していないが、その顔は耳まで真っ赤に染まっている。

「……にしてもどうしたんだそれ？ 先生にでも頼まれたのか？」

「あ、ええ、さっき米山先生に呼ばれて、四階の教材室に持って運んでくれたって言われたから」

一応補足しておく、米山というのは俺達のクラス担任兼、生物担当の教師である。三十八歳にして髪が生え際が後退気味で、いまだ独身。授業が分かりにくい、女生徒を見る時の目付きがエロい、生徒に対する横暴な態度がむかつく、存在自体がなんかヤダ等々、生徒達の間ではかなり評判は悪い。

「米山かよ……あんの若ハゲ野郎め」

受験生にこういう事を頼むな、と言うか人に頼んでないで自分で行け、という話である。やっぱあいつあ卒業式終わった後に一発ぶん殴るところか、等と危ない事を考えながら、美月の足元にある箱を持ち上げようとして、

「よっ……くおっ!？」

予想以上の重さに筋を違えそうになった。

「……あんのハゲ何考えてんだよこんな重いもん女子に持たせっか普通!？」 美月も断れこんなもん!」

米山もとい若ハゲへの殺意を再燃させながら、今度は腰をすえてしっかりと箱を持ち上げ、肩に担ぐ。ずしりという感触に、ぐらりと体が揺れる。こんなものを恐らく一階の職員室から運んできたのだから、かなりの労力だっただろう。これを四階まで運んでいくのは男でもかなりの重労働だ。

「え、ちよっ、あの、高井田君？」

「つとと……こっ、これ教材室の前まで持ってつといてやつから、悪いけど下に転がってつたゴミ箱教室に置いてくんね？」

「え？ わ、悪いわよそんな」

「いーんだっての。またさっきみたいにコケて怪我しちゃったら危ねえだろ。くおっ……そ、そんじゃ頼んだぜ？」

まだ何か言いたそうな美月を放っておいて、俺はよたよたと残りの階段を登り始めた。

第16話（6月）～予期せぬ言葉～（前書き）

先日、部屋を掃除してたら昔書いてた小説のデータ入りCD-R  
なぞを見つけちゃいましたね……。いやー、中々こう、文章力つての  
は上がらないもんなんでしょうかね。一年前から小説まがいのもの  
を書いてますがちっとも上達してる気がしません（汗）

## 第16話（6月）～予期せぬ言葉～

「どっ……せいっ!」

半ば落とすように段ボール箱を床に置き、俺は背中をぐいっと反らした。

「ふっ……くああああ」

緊張を強いられていた背中と腰の筋肉が弛緩していくような感覚に、自然と変な声が漏れる。

高校に入ってから部活に所属しなかった為に慢性的な運動不足に陥っている俺にはかなりハードな重さだったが、どうにか運び終える事が出来た。

あ、つーか階段登った後は床に置いて引き摺っていきゃよかったな。

なんて事を思い付いたところで既に運び終えているのだから何を今更、である。どうしてもっと早くこの考えに至らなかったのかと軽い自己嫌悪に陥りそうになったところで、廊下の奥の方から美月がこちらに走ってくるのが見えた。荒くなっていた呼吸を深呼吸で無理矢理整える。他人の前、特に異性の前では強がっていたいお年頃なのだ。

「高井田君大丈夫だった?」

「おう、どうにかな。ゴミ箱置いてきてくれたか?」

「それは大丈夫」

「ん、サンキュー。さつてとお……そいじゃ俺帰るわ」

「ええ、悪かったわね高井田君」

「だから気にすんなっての。お前もさつさと帰れよ? 居残ってつとまたなんか頼まれちまうぞ?」

「私はまだ帰れないわ」

「あ? 何で?」

「これあと三つあるから。それを運ばなきゃ」

「……あ？」

「本当にありがとう。それじゃまた明日」

……ガッデム!!!!!!!!!!

「つとに占いつてのは……」

「え？ 何か言った？」

「いや何も……」

あんな事を聞かされればもう乗りかかった船と言うやつで、手伝わざるを得ない。

一人で一個を運べれば早いのだがどうにも重過ぎる、というわけで、一つの箱を二人で運ぶ、という手段をとる事となり、俺達は今階段を横歩きで登っている。

「そーいや美月は占いとか信じてるタイプか？」

「占い、って……あの手相がどうか字画がどうか、そういうの？」

「いや、そんな大層なのじゃなくてよ。星座とか血液型とか、そんなライトな感じのやつ」

「それってライトなのはよく分からないけど……どうしたのよいきなり？」

「いや、まあただ何となくってやつ」

本当のところ、何か話していないと間が持たないのだ。

美月とは二年生の時から同じクラスで、いつも俺達三人の会話に混ざってきていたのだが、その発言のほとんどが上野に対するものなので、実のところ俺は美月と会話らしい会話をした記憶がほとんど無い。

「んー……基本的には信じてるわけじゃないわね」

「基本的に？」

「簡単に言うなら結果次第って奴かしら。ほら、よく朝のテレビ番

組で星座占いやってるじゃない？ 今日の占いカウントダウンってやつ」

「あー俺それ毎日見てる」

「あら奇遇ね、私もよ。まあとにかく、そういう番組の中で自分の星座が一位になってたりしたら、やっぱり信じなくなっちゃうかな。逆に最下位だったりしたらどうでもよくなっちゃう。ま、要するに、自分に都合がいいトコだけ信じよう、って話」

あれ？ なんだか俺に考え方が似ているような気が……まあいいか。

「美月って何座だったっけか？」

「私？ 十一月三日のさそり座。今日は一位だった」

「マジでか？ 俺とおんなじじゃん」

と言うか一年以上の付き合いなのにお互いの誕生日も知らないってのは我ながらどうかと思う。いや誕生日に関する話題が出ないのだから仕方ないと言えば仕方ないか。

「そう言う高井田君は？ 占い信じてるの？」

「俺も美月と似たような感じだな。その日の結果次第」

「あら、意外と似た者同士かもね、私達」

普通の人間ならこういった台詞は微笑みながら言うのだろうが、美月はやはり表情を崩さない。

「それで？ 今日の占いは当たってた？」

「いんや散々だったな……」

今日の一連の出来事を思い出してまたため息が漏れた。

「何かあったの？ …… ってまあ確かにこんな荷物運び手伝わされたら散々よね。本当にごめんなさい」

「あ？ あ、い、いや、そういう意味じゃねえよ。俺が言い出したんだから気にすんな」

……何だかやりづらい。上野や北澤の時と同じような態度で接してはいけないような気がするのだ。同じ異性である夏乃のように接するのも気が引ける。

どこことなく気まずい雰囲気を漂わせたまま、時折たどたどしい会話を織り交ぜつつも段ボール箱を運び、作業が終わった頃には俺がゴミ捨てに行ってから一時間が経過していた。

「お、終わった……一応訊くけどもう運ぶもんはねえよな？」

「ええ、もう大丈夫。本当にありがとね高井田君。私一人でやってたらもつと時間かかってたわ」

「いいっていいって。そいじゃ今度こそお疲れさん」

「あ、高井田君ちよつと待って」

「なんだよ？ 実はもう一個ありましたってか？」

「うっん、そんなんじゃないくて。……途中まで一緒に帰らない？」

「？ ……ああ、そりゃ構わんけども」

「……………」

「……………」

二人で教室に戻って通学鞆を回収し、昇降口を過ぎ、駐輪場を出ても美月から何かを喋り出す事は無かった。こうして並んで自転車を漕いでいても会話らしい会話は無い。

ちなみに先程昇降口にいた上野はとっくに帰ってしまっていた。あいつならこの気まずい空気をどうにかしてくれる、なんて俺の期待は敢え無く砕け散ったわけである。

何か会話をしなければと必死に考えたところで、会話のボキャブラリーの乏しい俺の頭ではろくな案が浮かんでくるはずも無く、結局、終始沈黙を保ったまま分岐路に到着してしまった。

「あ、あつと、そいじゃ俺んちこつちだから」

「ええ、それじゃ」

ようやくこの状況から開放された、と安堵のため息をつこうとし



た、その時だった。

「……ごめんやっぱりちょっと待って高井田君」  
再び引き止められ、手元のブレーキを慌てて握る。

「……どした？」

「突然で申し訳ないんだけど」

唐突な切り出しに、思わず眉を顰めた俺に、美月は相変わらずの無表情のまま、

「私と付き合ってください？」

さらりと言ったのけた。

「……………はい？」

その時、近くの電柱にとまっていた鳥が、かぁ、と一声鳴いた。

## 第17話（6月）～予期せぬ展開～

玄関の扉を開けて靴を放るように脱ぎ捨てる。

「たっ、ただいまっ！」

お袋は台所で夕食の準備をしていた。

「はいおかえんなさい。ずいぶん遅かったじゃない。また上野君達とご飯食べてきたの？」

「いや、掃除がちよつと長引いて……ってんな事あどうでもよくてっ、夏乃は！？」

「ああ、夏乃ちゃん？ とりあえず病院連れてったらやっぱり風邪だそうよ。安静にしておけばすぐ治るって」

「あ、そ……」

身体から力が抜け、安堵のため息を吐く。一日の心労の種がここにきてようやく解消された。

「あら、でつかいたため息吐いちゃって。そんなに心配だったの？」

「い、いや俺あ別にそんな……」

「気になって気になって授業に集中出来なかったーって顔に書いてあるわよ？」

そう言って意地悪く微笑むお袋。頭部に血液が上昇してくる感覚。今の俺は耳まで真っ赤だろう。

「っ……着替えてくるっ！」

「はいはい行ってらっしゃーい」

振り返った時、視界の隅にちらりと映ったお袋の表情が邪悪に微笑んでいたのが気になった。

廊下に出て、階段を登りながらふと考える。

あれ？ そっぴい今夏乃はどうしてんだ？

一人であの家にいるんだろうか。だとしたら後で晩飯届けるついでに様子見に行ってみようか。お袋にからかわれるのだろうが。

階段を登りきり、自室のドアを開けて、

「……………」

その光景を見た瞬間、喉元までこみ上げてきた絶叫をすんでのと  
ころで飲み込んだ。

「ん……………」

俺のベッドの上には、額に冷却シートを貼り付けて、顔を真っ赤にしたパジャマ姿の夏乃が眠っていた。

「……………」

大きな音を立てないようにそっとドアを閉める。鞆をドアの前に置き、階段を下り、台所のドアを開け、中に入り、ドアを閉め、

「……………こおんのクソババアっ！」

声を限りに叫んだ。

「あら失礼ね。クソとは何よクソとは」

いけしゃあしゃあと抜かしやがるクソババアもお袋。

「何で、夏乃が、俺の部屋で、寝てんだよっ!？」

俺の部屋の方角を指差すジェスチャー付きで問い詰める。

「あんたあの家病人一人置き去りにしろっての？ 血も涙もない

わね。そんな事言う酷い息子持ってお母さん悲しい……………」

「別に俺の部屋じゃなくなたっていいじゃねえか！ 居間のソファとかあんたらの寝室とか……………」

「だって夏乃ちゃんがあんたの部屋がいいって言うから」

「あ……………」

予期せぬ言葉に体温が一気に上昇する。

「つてのは冗談だけだね」

「……………お前ほんつつつつつつつつつつと死んでくれ」

つてか俺の胸のドキドキを返してくれ。

「……………まあ、一応ちゃんとした理由があるわけよ」

「……………一応聞いてやる」

「お父さんしばらく帰ってきてないじゃない？ だからお父さんのベッドろくに手入れしてないのよ。そうなると残りは私のベッド、あんたのベッド、居間のソファの三つ」

少し補足しておくと、うちの親父は単身赴任中で、月に一度こちらに帰ってくればいい方である。

「……おう」

「居間のソファだと看病しやすいからいいかなと思ったんだけど、結構硬いし病人寝かせるのに適してないから除外。残るはあんたと私のベッド」

「……おう」

「私のベッド使わせちゃったら今晚私ソファで寝る事になっちゃうじゃない？ それはさすがにきついから、じゃああんたのベッド使わせちゃおうと」

「結局はてめえの自分勝手な都合であるわけだ！」

「いいじゃないあんた若いんだから」

「若さ関係ねえだろ！」

とまあこんな問答がこの後十分ほど続いたのだが、結局お袋は折れず、今晚の俺はソファで寝る事になった。

.....

トレイの上に雑炊入りの土鍋と薬味、取り皿代わりの小鉢、医者からもらった処方箋、水が注がれたグラスを載せて持ち上げる。

「よっ……つとと」

中々バランスが取りづらい。ファミレスでバイトしている人間達の偉大さを実感しながらそろりそろりと歩き始める。

「こぼしたらちゃんと掃除しなさいよー」

居間からは茶化すようなお袋の声。こぼさないように気を付けろと言わないのは、俺がこぼす事は確定事項である、という意味だろうか。

腹は立つたが今何か反論してしまえば確実にトレイがひっくり返る。何も言い返さずに足でドアを開け、廊下に出た。

一歩一歩慎重に階段を登る。次の段に足をかける度にガラスの水がゆらゆらと揺れ、足を止める。

慣れない事はするもんじゃないなと後悔しつつ、それでもどうにか二階に到着した。

自室の前に立つ。とりあえずトレイを床に置き、こんこん、と扉を軽くノック。

「夏乃ー？ 飯出来たぞー？」

……返事は無い。まだ寝ているのだろうか。とりあえずドアを開けてトレイを持ち、中に入る。

「すー……すー……」

予想通り、夏乃はベッドの上で規則正しい寝息を立てていた。

「……………」

トレイを卓袱台の上に置き、どうしたもんかと考える。

ぐっすり寝ているので起こすのも悪いような気がするが、冷めた雑炊ほど不味い物は無い。

数秒間考え抜いた末、起こしてしまう事にした。

「おい、夏乃起きろ、飯だぞ」

掛け布団の上から軽く身体を揺する。

「……………んー」

夏乃が細く目を開ける。

「あれー……佳ちゃん……何でここにいのー……？」

こいつ、自分の部屋にいと寝ぼけているんだろうか？

「お前な……誰のベッドで寝てんだかよく思い出してみろ」

「んー……………ああそか、ここ佳ちゃんの部屋か」

「思い出したみたいだな。ほれ、晩飯持ってきたからさっさと食え」  
「あんまし食欲無いかも……」

「無理にでも食つとけ。少しでもいいから」  
雑炊を土鍋から小鉢に移し、手渡す。

「ん……分かった」

スプーンで少しだけすくい、口に運ぶ夏乃。数回租借し、嚥下した後、その顔に薄い微笑が浮かんだ。

「……やっぱり小母さんは料理上手だね。今度教えてもらおっかな」  
「後で頼んでみりゃいい。多分お袋大歓迎だぜ」

「受験が終わったら言ってみるね」

それきり夏乃は何も言わず、黙々とスプーンを口に運び始め、俺はその様子をぼんやりと眺めていた。

「ふう……ごちそうさまでしたー」

両手を合わせる夏乃。トレイの上には見事なまでに空になった土

鍋。

「お前……食欲無いんじゃないのか？」

「食べ始めると意外に入っちゃうもんだよね」

「あ、そ……」

「……何も言うまい。」

「まあいいや、そんで？ 体調の方はどんな感じだ？」

「んー……まあ、朝よりはだいぶん楽かな？」

「そりゃよかった。そんじゃ後はまた寝とけ」

トレイを持って立ち上がった俺を、

「ちよい待った」

ベッドの上の夏乃が引きとめた。

「どした？ 何か欲しいもんでもあんのか？」

夏乃は俺の問いにすぐには答えず、しばらくじーっと俺の目を見

つめ、

「……佳ちゃん学校で何かあったでしょ？」

見事なまでに的を射たその言葉に、俺の心臓がどくん、と跳ね上がった。

## 第18話（6月）〈選択〉（前書き）

実は数日前までちよいと入院しちゃってまして、久々の更新です……少し長めかもしれませんが。



## 第18話（6月）～選択～

俺の右の耳元で、上野の顔をした悪魔が囁きかける。

「いーじゃん話しちまえよ佳祐。夏乃のリアクション次第で彼女の本音が分かるぜ？ 自分の好きな男が他の子に告られたーなんて聞いて慌てねー女なんざいねーだろ？」

……その言動が何故だかムカつくのはさて置き、上野の顔をして  
いる癖に、悪魔の言い分には確かに一理ある。

すると今度は左の耳元で、北澤の顔をした天使が囁きかける。

「落ち着いてよく考えてみる佳祐？ この時点でもう既に何かあったって悟られてるんだ。ここで下手に隠したところで、嘘ついてるのはすぐにバレるだろう。下手に勘ぐられるくらいならさっさと本当の事話してしまった方が賢い選択だと思うぞ？」

……うん、まあ北澤もとい天使の言い分ももつとも言えはもつとも……と言うかちよつと待て？

二人とも結果的に同じ結論に辿り着いているような気がするの  
は俺だけではないはずだ。

「だって……なあ？」

悪魔が曖昧に同意を求めると、天使もやはり曖昧に頷き、

「いや……ここでしらばつくれる必要性を感じないと言うか、普通  
ここでそういう選択肢自体思い付かないと言うか……」

……成程成程おーけい分かった。つまり貴様らは、夏乃に

「何かあった？」

と訊かれた瞬間、しらばつくれようなんて選択肢が頭の中をよぎつ  
た俺はぶつちやけ馬鹿だと、卑怯だと、そう言いたいわ

「どしたの佳ちゃん、いきなり黙りこくって？」

夏乃の声で我にかえった。

「……ん？ あ、ああ、いや、悪い、ちよつと内なる自分達と会話  
してた」

「……佳ちゃん私の風邪うつっちゃった？ 熱とか無い？」

訝しげに俺を見つめる夏乃。当然だ。

「ああ、いや、大丈夫だうん。問題無い」

「まあ、佳ちゃんがそう言うならいいけど……。それで今日何があったの？」

「いや、その……何だ。まあ、ちよつと相談乗ってくれるか？」

「相談？ いーよん。お姉さんに何でも訊きなさい」

えへん、といった感じに、偉そうに胸を張る夏乃。

俺と夏乃が同年齢であるという、言うまでも無い事実には敢えて触れないでおく。

いちいち反応していたら話が進まないのだ。

「いや、それがだな……実は俺今日……こ、こ……こ告白、されちまってよ」

………

ここで、美月に告白された直後まで時間を戻そう。

「突然で申し訳ないんだけど、私と付き合ってくれない？」

「………はい？」

仮に俺と同じ立場に立ったとして、ここで美月に告白される事を予想出来た人間が、一体体何人いるのだろうか？

と言うか告白するのはもっとこつ、俺の下駄箱に

「放課後、校舎の裏に来て下さい」

とか書かれた手紙が入ってて、それでもって放課後校舎裏に行ってみると、俯き頬を赤らめた女の子がためらいがちに

「ず、ずっと前からあなたの事がず、好きでしたっ！ もし今彼女とかいなければ、その……わわ私と付き合って下さいっ！」  
なーんて言っちゃっ……げ、げふんげふんっ！

と、とにかくだ。告白というイベントにはムードというものが必要不可欠であり、少なくともこんな色気もへったくれも無い場所で、「付き合ってくれない？」

などという一言であつりと済ませるような告白、俺は断じて認め「聞こえなかったならもう一度言うわね。前から私は高井田君が好きでした。だから私と付き合っして下さい」

だ、断じて認め……いや、今は何かもう、認める認めないの問題じゃない。

「あー……いや、その……」

正直、心は揺れていた。

もし仮に、夏乃と仲直りをしていなかったのなら、俺は迷わずに首を縦に振っていた。

成績優秀。

容姿端麗。

欠点と言えば、無表情と口の悪さくらいなものだろう。

そんな美月の事が俺は嫌いじゃないし、事実、仲直りするまで夏乃の事はもう諦めていたのだから。

しかし、夏乃と仲直りして、毎日登下校を共にし、勉強を教わっているうちに、中学校三年のあの日の想いに、再び火が灯ってしまった。

だからと言って今、夏乃の心が俺に向いているとは、三年という月日が流れて、夏乃が俺を異性として見てくれるようになったとは限らないのだ。

夏乃が求めているのは、あくまでもあの頃と同じ、  
「幼馴染の高井田佳祐」

なのかもしれない。

それに対して、美月は俺の事を異性として好きだと言ってくれている。

交際を申し込んでくれている。

ここで美月の告白を受け入れるのは簡単なのだろう。でもそれは彼女に、何より自分の気持ちに嘘を吐いてしまう事のような気がする。

しかし、美月の想いに応えたいと思う自分も、心の中に確かにいる。

「……………返事、訊かせてくれない？」

長い沈黙の後、真っ直ぐに俺を見つめる美月。

俺は…………。

## 第19話（6月）〜いつも通りの彼女〜

「ふむふむ……そいで佳ちゃんは返事保留して帰ってきたってわけですね」

「オチを先に言うんじゃないよ……ってお前何で分かった？」

「そりゃあ伊達に十年以上佳ちゃんと幼馴染やってませんですから」  
ベッドの上で上半身を起こし、腕を組んだ夏乃は自慢げにふふんと鼻を鳴らした。

……………

「わ……悪い。いきなり過ぎて混乱してる。返事するまで少し時間をくれ」

悩んだ末に頭で出した結論は、

「ここで早急に返事するのは双方にとって得策ではない」という、体のいい問題の先延ばしだった。

「少して……どれくらい？」

ほんの少し、いつもこいつの顔を見ていないと分からないような、微妙な変化ではあるが、不安げな表情を浮かべる美月。

彼女の身長はちょうど俺の目の高さであり、上目遣いで見上げるような形になってしまっている。

「……っ」

その視線が俺の本能に揺さぶりをかけた。

この表情は……可愛いってか……キツイ。

心臓の鼓動が少しずつ早くなってくるのが、自分でも分かる。

「高井田君……?」

「うおっ!? おおう……あーっと……ごめん。どれくらいとは言えないんだ。自分の気持ちに整理つける時間が欲しいんだ。返事は必ずするから……頼む」

「……分かった。待ってる」

.....

「……まあ、てなわけでその場は別れた」

話し終えてから、ちらりと夏乃の表情を窺う。

「ふーん……それで?」

その表情に動揺は見られない。良くも悪くも、

「いつもと同じ」

夏乃がそこにいた。

「そ、それでって……まあ、その、俺あ今まで告白なんてされた事がねえからよ、どうしたもんかと……」

「簡単な話じゃん。その子、美月さんだっけ? 美月さんの事が好きならオッケーすればいいし、そうじゃないなら断ればいいわけなのです」

言葉にすればとても単純。

とても単純で、単純過ぎるから、とても難しい。

「いや、確かにその通りなんだけどもよ……」

言葉を濁す俺を見て、夏乃は呆れた表情でため息を吐いた。

「……あのね佳ちゃん、初めて告白されて混乱しちゃってる気持ちはよく分かるよ? けどさ、こーゆーのって自分で考えなきゃ駄目だと思っんだ」

「……………」

「例えば私がその美月さんと付き合った方がいいよって言ったとするじゃない？　それでさ、私にそう言われたしその通りにして付き合おうかなー、とかって決めるような事じゃないと思うんだよね」

「そ、そんな俺だって」

分かつてる。分かつてはいるけれど、それでも……。

「うん、佳ちゃんなら大丈夫だと思うけどさ、それでも大事な事だからやっぱり言わしてもらいたかったんだ。ひよつとしたら佳ちゃんにとって一生ものの選択になるかもしれないんだしさ」

そう言って夏乃は、熱に浮かされた真っ赤な顔で、朗らかに笑った。

……………

俺はどんなに控え目でもいいから、ちよつとした動揺でも構わないから、夏乃に反対の意を示して欲しかった。

そういう事言わない奴だと分かっているけど、それでも望まずにはいられなかった。

第20話(7月)ゝテスト終了ゝ(前書き)

祝！ (ようやく) 7月突入&20話突破&アクセス数2000  
名突破！ これからも佳祐達の恋物語を、作者共々よろしく願  
います！



## 第20話（7月）〜テスト終了〜

「……はいそこまで！」

教師の言葉と同時に、試験時間終了を告げるチャイムが鳴った。

「ふう……」

左手に握ったシャープペンを机上に転がし、凝った肩をほぐすように首をぐるりと回転させる。

首の骨が鳴るべきという小気味いい音は、四日間に渡る期末試験から開放されたクラスメート達の喧騒に紛れて掻き消えた。

「おう、どうだったよ佳祐？ 試験勉強とやらの成果はあったか？」  
上半身だけこちらに向けた北澤の言葉は、どこか小馬鹿にしたような響きを含んでいる。

何度も言うが、今までそう思われても仕方の無いような素行をしてきた以上、別段腹も立たない。

「んー……まあ少なくとも赤点どうこうってな心配はねえかな」  
当たり障りのない返事をして、後ろからまわってきた答案用紙の束を渡す。

「……………」

狐につままれたみたいなの、なんて表現がよく似合う表情で俺の顔を見つめる北澤。

「何だよ？ 俺の顔に何かついてんのか？」

「……いや、まさかお前からそんな台詞聞けるとは思わなかった。  
もしかしてもしかすると、こりゃ本当に勉強してたのかもしれないな」

北澤は笑いながら体を前に向けた。

信用されるかは大した問題じゃない。

別に褒められるために勉強しているわけではないし、結果で示せばいいだけのだから。

と、背後から両肩をがしりと掴まれた。

「けえーいーすうーけえー……」

同時に、この世に未練たつぷりなまま逝った幽霊みたいな声が背後から聞こえる。

いや、こりゃ幽霊なんかよりタチ悪いかもしんねえや。

両肩に乗った手を振り払いながら、ため息混じりに振り返る。

「俺……今回こそは駄目かもしれん……」

そこには予想通り、と言うか予想するまでもなく、憔悴しきった表情の上野が、縋るような目付きで俺を見ていた。

今回の期末試験は今まで習った事項の総復習、といった意味合いも含まれていたらしく、どの教科も範囲が馬鹿みたいに広い。

夏乃というスパルタ(?)教師のもとで勉強をしていた俺ならまだしも、相も変わらず一夜漬け派である上野に、どうこう出来るような問題達ではなかった。

「んなもん知るかよ。自業自得なんじゃねえの?」

しっしっ、と手で追い払うようにしながら前へ向き直ろうとする。生憎今の俺は、苦勞しなかった奴にかける程、情けってやつを持ち合わせていないのだ。

しかし上野は再び俺の肩をホルルドして引き寄せる。

「なんだよその冷たい言い方! 俺とお前は二人で一つ! 補習常連の馬鹿コンビだろ!」

「今回の俺あいつもと違うんだよ。悪いが補習は一人で受けな」

「ぬあっ!? けっ、佳祐お前大親友の俺を裏切るのか!? 裏切るうってのか!」

「あーもーひつついてくんじゃねえよ鬱陶しい!」

「全く……毎回テストの度に落ち込んでるのに、また同じ過ちを繰

り返したのかしらあなたは？」

背後から聞こえた声に完全に不意をつかれ、無意識に体がびくりと反応した。

「委員長……！」

天敵を見るような上野の険しい視線は、俺の背後に注がれている。ゆっくり振り返るとそこには、無表情で腰に手をあてた美月が立っていた。

第20話（7月）～テスト終了～（後書き）

今月のメインは佳祐と夏乃の、波乱のデート（になる予定）です  
（笑）

感想、批評引き続き募集しております！

## 第21話（7月）人見知りの暴挙？（前書き）

最近ですね、Love is Allという中編小説（こんな言葉あるんでしょうかね……？）を書き始めたんですよ。

いつもの俺とは一味違う文章を、というコンセプトで書き始めてみたシロモノなんですが、もしよろしければご覧になってやって下さいm（ー）m

## 第21話（7月）人見知りの暴挙？

「どうせあなたの事だから、まだ一か月あるまだ一週間あるってずつと先延ばしにして結局一夜漬け、って所でしょ？ 愚の骨頂ね」

「う……っ」

「同じ失敗を繰り返すのは学習してない証拠。あなたのその頭には何が入ってるのかしら？ それとも空っぽ？」

「……お、おっ、お前にそこまで言われる筋合い」

「筋合い？ 親切心からの忠告にいちいちそんなもの必要なの？」

大体、言われたくないんだったらそれ相応の努力をすればいいじゃない」

精一杯の反論も一蹴された上野は、怒りから顔を真っ赤にして口をぱくぱくとさせている。

男なら既に殴っているのだろうが、相手が女なので手が出せない。

「……………」

怒り心頭の上野からちらりと美月へ視線を移す。

と、まるでそれを待っていたかのように、上野に向いていた美月の視線がこちらに動いた。

「……っ！」

交錯する視線。

俺は慌てて目を逸らした。

……………

あれから数週間経つが、俺は相変わらず結論を出せずにいる。それでも返事を催促するような事はせず、告白する前と変わらない

い態度で接してくれている美月。  
が、やはり待たせているという負い目からか、俺としてはどことなく気まずいものがあり、このような態度をとってしまう事も少なかつた。

.....

「..... 美月もその辺にしといてやれ。上野も今回ばかりは流石に懲りただろ？」

いつの間にやら再びこちらを向いていた北澤が、珍しく美月を諫めた。

「..... ま、北澤君の言う通りね」

大人しく引き下がった美月は、帰り支度をするために自分の席へ戻っていった。

「き、北澤.....」

初めて助け船を寄越してくれた事への感謝か、うるうると涙を滲ませた瞳で北澤を見上げる上野。

いや、ひよつとしたら美月に言い負かされた悔し涙なのかもしれない。

「あー..... そんな目で見られると正直気持ち悪いんだが」

「はうあつ!？」

..... ある意味トドメの一撃だった。

がつくりとうなだれた上野に構わず、こほん、と咳払いを一つした北澤が続ける。

「..... さ、さてと。長かった期末試験も本日ようやく終わったわけだし、今週末にでもどっか遊びに行かないか？」

「はいはい俺さんせーっ！」

北澤の誘いから数秒の間を置かず、がばっと起き上がったかと思うと、手を上げて勢いよく立ち上がる上野。

その余りの変わり身の早さに、俺も北澤も呆れを通り越して苦笑が漏れた。

「……ん？ てか珍しいな北澤。お前からそんな事言い出すなんて初めてじゃねえか？」

こういった小さなイベントは、最初に上野が言い出し、俺達二人がそれについていく、という形だった。

北澤が発案者になるなんて、ひよつとしたら知り合って以来初めてかもしれない。

「あ、ああ……ま、たまにはいいだろ。あ、そうだ。たまにはついでに委員長も誘ってみようぜ」

「「うえええっ!？」」

上野と声が揃ってしまったのは、この際脇に置いておく。今この状況において、そんなことは大した問題ではない。

そんな俺達の非難の声を無視して、美月の席へと歩いていく北澤。  
「……………」

その後ろ姿を呆然と見つめていると、肩をぐつと掴まれ、

「どっ、どどどーしちゃったわけよ北澤の奴！ 試験勉強のストレスで頭イッちまったのか!？」

上野の慌てようもご尤もではあるが、俺に訊かれたところで、満足いくような答えは持ち合わせていない。

俺だって何が何やら混乱しているのだから。

俺、こと高井田佳祐。

上野雄大。

そして北澤信次。

お世辞にも気の合う仲間達、などとは言えない俺達三人の間にも、



ある一つの共通点がある。

女という生き物に対する免疫が殆ど、と言っている程に無いのだ。別に二人を庇う訳ではないが、少なくとも俺から見て上野と北澤の二人は、別に見れない顔をしているわけでは決してない。俺のルックスに関しては自分ではよく分からない。

ならば何故彼女の一人もいないのか。

答えは簡単、問題は中身なのだ。

上野の場合、授業中にいきなり立ち上がって本を破り捨て、教室から出て行く、というようなその奇行の数々から、クラス内ではほとんど珍獣扱いされている。

俺はまあ、言わずもがなと言うか何と言うか、生来の無愛想な性格と不景気そうな表情、止めに相手突き放すようなぶっきらぼうな言動で、クラスメート達から敬遠されている。

そして北澤の場合、上野のようなとち狂った真似はしないが、彼はああ見えて実は極度の人見知りなのだ。

親しい人間以外は例え同姓であっても、殆ど会話をしない。と言うか本人曰く出来ないらしい。

そんな人間が、ある程度親しくなってきたとは言っても異性に自分から話しかけに行く、更には俺と北澤以外の人間を遊びに誘おうだなどと言いだしたのだから、上野が驚くのも無理は無いのである。

## 第22話（7月）～忘れていること～

驚きやら感動やら心配やら不安やら、とにかくそういった感情がごちゃごちゃと入り混じった複雑な心境の俺達を他所に、帰り支度をしている美月に近付いていく北澤。

「……………」

北澤が何やら声をかけて、座っていた美月が顔を上げる。

「……………」

北澤がどんな言葉で美月を誘っているのか知りたいところではあるのだが、二人の会話の内容は、机の足が教室の床を引っ掻く音、他の生徒達の話し声に邪魔されて、俺達の耳まで届いてこない。

「……………」

腕を組み、ほんの少しだけ眉根を寄せて考え込んでいる風の美月。うん、まあ、当然のリアクションだ。いくらある程度気心が知れている相手だからと言って、あいつはいきなり男三人に週末何処かに遊びに行かないかと誘われて、はいそうですかと快諾するような性格

「　　っ!？」

最早本能、と言ってもいいかもしれない。

美月の顔、と言うか視線がこちらを向くような気がして、俺は咄嗟に、首を明後日の方向へ向けた。

「おおっ!？　ど、どうした佳祐!」

向いた先には上野の馬鹿面。

突然の事態にうろたえた風の上野が訊ねてくる。

「あ、いや……………何でも無え」

理由なんて言えるはずも無い。特にこいつには。

「…………?　　つと。勇者が帰ってきたぞ」

その言葉に視線を戻すと、会話を終えた北澤が戻ってくるところだった。

「そ、そいで？ 成果の程はどうでしたよ兄さん？」

美月が来るということが自らにどんな災害をもたらすのかすっかり忘れていたらしい上野の、恐る恐るの問いかけに、

「ん？ ああ、たまにはいいかもしれないわね、だとさ」

それが何でも無いことのように、俺達二人が予想だにしていなかった返答をさらりと言ったのける北澤。

「「……………何iiiiiiiiいつ!?!」」

俺と上野の叫び声が再びハモる。

ちなみに、俺達の突然の叫びにもクラスの人間は反応しない。

何と言つかまあ…………皆俺達（主に上野）の奇行に慣れてしまったということか。

現代人にありがちな、見て見ぬふりの信条、我関せずの精神というやつなのだろう。

「…………いきなり大声を出すな。前々から言おう言おうと思っていたんだがお前ら二人は恥とか外聞つてのを身に付けるべきだぞ？」

心底呆れた、といった風に軽く眉をしかめる北澤の両肩を、がしりと掴む上野。

「き、北澤さん…………今あんたが言ったことは、つまりあの委員長の野郎が今度の休みに俺達と一緒に遊ぶことになったってのあ、ホントのコトなんですかい…………？」

誰かに聞かれて困るような内容でもないのに何故か小声で、更に口調が変になっている辺りから、困惑もとい混乱具合が伺える。

と言うか美月は野郎じゃなくてれっきとしたオンナだぞ上野。

「？　ここで俺が嘘ついて何の得があるんだよ？　つーかそこまで珍しいことか？　単純に今まで誘わなかっただけなんだし」

心底質問の意味が分からない、といった風の北澤。

……駄目だ。こいつは事の重大さを全く分かつちやいない。

普通、女の子が好きでもない男の子と一緒に遊ぶのは長くても中学生までと相場が決まっているのだ。

誰が何と言おうとそうなのだ……って俺の身近に例外が一人いたな。

「あわわわわわわわわ……」

あ、上野が壊れた。理解不能な事態の連続に、心がついていけなかったのだろう。

「……おーけいおーけいよく分かった。それで？　いつ、どこに、何しに行くんだ？」

この世間知らずに一から説明してやろうかとも考えたが、その気力も失せた。

今はとにかく事実を見つめるべきだ。

北澤が美月を遊びに誘ったところ、そしてどんな気の迷いか知らないが、美月はそれを承諾した。

面倒なことを考えなければ、単純にそれだけの話なのだ。

「今週の土曜日、つまりは明日だな。いつもみたいに駅前で映画がカラオケかってとこだろ。んでその後どっかで昼飯食ってゲーセン行くなり駅ビルでぶらぶらするなり」

急と言えば急だが、その辺りが妥当だろう。夏乃との図書館勉強をサボる口実にもなるし一石二鳥……ってあれ？　俺何か大事なことを忘れてるような……。

「そんな感じでどうだ？　細かいことはケースバイケースで……おい佳祐？　どうかしたか？」

「……ん？　ああ、いや、何でもねえ。とりあえず了解した。そんなに俺先に帰っから、美月に伝えといてくれ」

「分かった。お疲れさん……おい上野、そろそろ正気に戻れ」

「あわわわわわわわわ……」

「……駄目だこりゃ」

北澤が、壊れたままの上野を放置して美月の元へ向かうのを見届けてから、俺は教室を後にする。

「……………」

出て行く瞬間、視界の隅に映った美月は、俺の方に顔を向けていたような気がした。

## 第23話（7月）ゝ避暑か水分補給かゝ（前書き）

随分とまた間が空いたもので……楽しみにしていた読者の皆様にはホント申し訳ないことをしたなと反省しまくりのこーしょーです

（´・`・;）

つい最近までちょっとしたスランプに陥っちゃってましたが、ようやく光が見えてきました（多分……）ので、きつと執筆スピードも上がるでしょう、いや、上げてみせますとも！汗

そんなわけで、どうかこんなこーしょーを見捨てないでやって下さいm（ー）（ー）m

## 第23話（7月）避暑か水分補給か

何だろう？ モヤモヤとしたというかこう……ヤキモキ、少し違うな。んー……、モキュモキュ？

「いやモキュモキュって何だよ」  
思わず独り言が漏れた。

あー……まあ、とにかくそんな、言葉では形容し難い気持ちを抱えたまま学校を出て、いつものように待ち合わせ場所であるコンビニへ到着。

「あ、佳ちゃんお疲れーっす」

既に到着して俺のことを待っていた夏乃は、コンビニで買ったらしいスポーツドリンク入りのペットボトル片手に、スタンドを立てた自転車に寄りかかっていた。

「悪い。結構待ったか？」

「んー、そんなでもないかな。十分ちよいってトコ」

涼しげな表情で平然と言ったのけて、ペットボトルをぐいっと呷る夏乃。

が、その顔をよおおおく見てみると、額にぼつぽつと汗の玉が滲み出ている。

「……中に入って待ってりゃよかったじゃねえか」

本日の天気は予報通りの快晴である。

うだるような暑さとは言わないまでも、照りつける太陽と気が狂ったような蝉の合唱の中で待っているのは、たとえ十分といってもきつかった筈だ。

……というかそもそも、待たせたこちらに全面的に非があるのに、口調はどうしても夏乃を責めるようなものになってしまふ辺りに自己嫌悪を覚えるも、それは後悔先に立たず、というやつである。

もっ少し言葉を選ぶようにと自分なりに心がけているつもりなの

だが、身についた性分というのは一朝一夕じゃ中々治らないものらしい。

「む、ま、まあそうなんだけどさ。でもお店の中じゃこれ飲めないじゃん？」

そう言つて顔の前に掲げた手の動きに合わせて、夏乃が持っていたペットボトルの中身がちゃばん、と小さな音を立てる。

「そんなん別に俺が来てから買やよかつただろ」

ため息交じりの俺の言葉に、

「……………きつ、緊急を要してたのです。すんげー喉が渴きまくつてたから避暑より水分補給を優先したわけであり、別に佳ちゃんが今言つた選択肢がさっきの時点で思い浮かばなかつたわけでは決して」

「じゃあ今の無駄に長い沈黙は何だ？」

「う……………あつ、そ、そう言えば佳ちゃん、今日の試験の方はどんな感じだったのかなっ？」

話の焦点をずらすという結論に達したらしい。

「……………まあ、少なくとも今回は赤点で補習つて展開はねえだろ」

普段頭がきれる癖に、こういうどうでもいいようなことに關しては全く頭が働かないこいつのことだから、恐らく本当に思いつかなかつたのだろうが、その辺りは軽くスルーして話を合わせる。

この暑さの中で不毛な言い争いに時間を費やすよりも、一刻も早く家に帰つてクーラーの効いたリビングでテスト終了の開放感に包まれながらまつたりしたい、と考えての判断である。

「そりや当然でしょーよ。何てつたつてこーんなに知的で可愛い家庭教師が毎晩勉強教えたげてたんですからねー」

ふふん、と得意げに鼻を鳴らす夏乃。

今の言葉は訊く相手によつてはいらん誤解を生んじまうぞ、なんてことはさて置くとして、その自信はどこからやつてくるんだらう。  
「……………ま、一応感謝しといてやるよ」

自分でもどうかと思うほどにぞんざいな口調である。



こいつの教え方が上手かったってのは事実だし、助かったと思っているが、ご存知の通り、俺はそれを素直に伝えることが出来ない性分なのだから仕方ない。

「んー、今のは佳ちゃんなりの感謝の言葉として受け取らしてもらおっかなっ」

長い付き合いのなせる業なのだろうか、そんな無愛想な言葉でも一応感謝の意は伝わったらしく、俺の顔を覗き込んで満面の笑みで応じる夏乃……くそ、やっぱ可愛い。

「……お、おらっ、んなこたどうでもいいからさっさと帰っぞ」

「ん、おっけー、さっさと飲んじやうからもうちょい待って」

そう言つと夏乃はペットボトルを口につけて、ぐいっとな顔を上に向けた。

ごくごくスポーツドリンクを嚥下するのに合わせて、露になった白い喉が小さく動く。

「っ……ぷはあっ！ よっし水分補給完了っ！ さーお家へ向けてレッツゴー！ ……ってどしたの佳ちゃん私の顔じーっと見て？ 帰んないの？」

「……あ？ いや、おう、そ、そうだな、とつと帰って涼むか」

はつと我に返り、夏乃がボトルをゴミ箱に捨てるのを待ってから、俺達はコンビニを後にした。

……「お前がジュース飲んでる姿に思わず見惚れてた」なんて、言えるわけねえだろ。

## 第24話（7月）～恋愛か友情か？～

「俺試験の度に思うんだけどよ、太陽がまだ頭の上にあんのに家帰るってのはどうも違和感ねえか？」

「あー何となく分かるかも。私達帰るのっていつつも夕方だもんね」  
「しかもこんだけ早いと帰っても特にすることが無え」

「あ、それなら勉強す」

「却下する」

「そう言うと思ったけどさ……でも何かあるでしょ？ 年頃の男の子らしくゲームとかえっちい本鑑賞するとかさ」

「えっちい本てお前……んなもん真っ昼間から見る奴あいねえよ」

「あ、えっちい本持つてるってトコに関しては否定しないわけですねお兄さん？」

「そりゃ俺だつて年頃の青少年だからな。そういう本の一冊や二冊……って何言わせてんだ馬鹿」

「別に私はそこまで訊いてないんだけどなー」

「ぐ……あーくそ、コンビニで立ち読みでもして時間つぶせばよかった」

「後悔先に立たずってねー。一応言っとくけど、こっからまたコンビニまで戻るのはワタクシ断固反対でありますたいちよー」

「安心しろ。俺もんなことするつもりはねえ」

「……そう言や、こうして二人で他愛も無い話をしながら下校するようになって、気が付けば二ヶ月が経ったのか。」

最初の頃はいつかクラスメートに見つかるんじゃないかと気が気じゃなかったのだが、今となっては見つかったらその時だろうと最早開き直ってしまっている自分だったりする。

帰宅してから、こちらでも毎晩恒例となってしまった勉強会までの余暇は全て睡眠に使ってしまおうか、なんてぼんやり考えていると、

「あ、そうだ」

不意に夏乃が口を開いた。

「ん？ どうした？」

隣を走る夏乃の方に顔を向ける。

「うん、今考えたんだけどさ。よーやつとテストも終わったわけですが、佳ちゃんも流石にそろそろ疲れが溜まってきてるんでない？」

「そりゃまあな」

試験一週間前に突入してから勉強会は毎晩日付が変わるまで行われていたので、慢性的な睡眠不足であることは否めない。

「でしょでしょ？ だからさ、ご褒美その一つで特別に今週のお勉強会はお休みにします」

「今週って……今夜含めて3日しかねえじゃねえか……」

今日は金曜日である。うちの学校は来週から一週間の試験休みに入るが、どうせその大半を夏乃と図書館で過ごすことになるのだから。

いや、『夏乃と一緒に過ごす』ことに異議は無いのだ。

と言うかむしろどんと来いってな感じである。

その間に「図書館で受験勉強をして」って言葉が入らなければの話だが。

「あ、そんな文句言うならやっぱり今の発言無かったことに」

「ごめんなさい勘弁して下さい……」

「んむ、素直でよろしい」

そう言っただけで満足に頷く夏乃。

俺の扱い方にも随分慣れてきたらしく、最近はこの感じで俺が言い負かされることが殆どだ。

最初の頃はことある毎に謝ってきたからどうなることかと思っただが、これはこれで中々に複雑なものがある。

「はあ……で？ ご褒美その一つからはその二があんだろ？」

「そりやもちろんです。ご褒美その二はっ！　だらららら……」

……ドラムロールのつもりらしい。

どうでもいいが巻き舌上手いなこいつ。俺だったら多分二秒も保たない。

「ららら……ほら佳ちゃん！　じゃじゃん！　とか何とか言ってくれなきゃ終わらないでしょ！　これ結構疲れるんだからね！」

そう言っつて再びドラムロール（？）を再開する夏乃。

自転車運転しながら巻き舌やってりゃ疲れるのも当然なんだろう。やったこともないし、別にやろうとも思わないが。

……それにしても、このまま放っておいたらどこまで続くんだらうか？

いや、かなり気になるところではあるが、そんなことをすれば貴重な三日間の休日が隣を走る暴君によって消し飛びかねない。

「はいはいわーったよ……じゃーじゃん！」

……誰かが聞いてるってわけでもないのだが、かなり恥ずかしいものがある。

かなり投げやりな合いの手だったのだが、それでも夏乃は一応満足したらしい。大きく息を吸い込むと、

「せっかくの休日だったのに一人で寂しく過ごすしかない可哀想な青少年のために、ワタクシこと宮下夏乃ちゃんが一日デートします！」

「……………ああ」

そう言えば、『試験が終わったら一緒に映画を観に行こう』なんて約束をしていた記憶がある。

「む、何よそのいまいちなリアクションはー？　私と映画行くのがそんなに嫌？」

「あ？　あ、いや、別にそういうわけじゃねえんだが……」

少し前までの俺ならここで内心小躍りしそうなほどに喜びそうなものなんだが、『デート』という単語を訊いて、一瞬、美月の感情表現に乏しいあの顔が頭をよぎった。

と同時に、美月に告白された日、恋愛相談をしたときの、いつもと変わらなかった夏乃の態度が俺の心に追い討ちをかける。

そうなるともう、例え夏乃とのデート（？）であつても素直に喜べない。

「だが何なんなの……あー。もしかしてこの前言つてた美月さんが気になるのかー？」

……女の勘つてのは恐ろしいと、俺はこの時初めて実感した。

「そ、そんなじゃねえよ。あいつは別に関係ねえ」

無駄だとは分かつていても、精一杯の虚勢で平静を装う。

「ふーん……ま、佳ちゃんがそう言うならいいけど」

図星だということくらいとくにばれているはずだが、しつこく言及してこない辺りはこいつなりの優しさなんだろう。

その証拠に、夏乃の顔はこれでもかというくらいにニヤついている。

「ちつ……それで？ 映画にやいつ行くんだ？」

「あ、それなんだけどね。駅近くの映画館、毎月第二と第四土曜日はカップルで行くとチケット半額にしてくれるんだってー。だから明日行こ？」

「随分とまた急な話だなおい……」

まあ確かに、今日は七月第二週の水曜日だが、まさかこいつ、そのために俺を映画に誘つてるんじゃないだろうか？

そんな疑念が浮かんでくるが、一ヶ月前からの約束だ。例え動機が不純であれ、勉強以外の目的で夏乃と休日を過ごせるわけだし、ここでわざわざ反故にするほどの理由なんて……ってちょっと待て。

「あー……なあ夏乃？ その映画つてのは明日じゃなきゃ駄目か？」

つい先程、北澤達とも遊ぶ約束をしていたのを思い出した。  
好きな女の子とのデート（？）やら、お財布事情やらといった私情を抜きにして考えてみても、優先順位的に言えば前々から約束していた夏乃との映画が上だ。

だが、正確な日時が指定されたのがたった今だということを考慮

に入れると、順位云々はなかなか微妙になってくる。

まあ何はともあれ、どちらかの予定をずらす必要性が生じてくるわけなのだが、

「駄目とは言わないけど、その代わり明日の午前中は『図書館で勉強コース』に変更となります」

「……………」

要するにこっちの約束は明日じゃなきゃ駄目らしい。

……さて、北澤達にや何て謝りゃいいかな。

詫びをいれるのは早いに越したことは無い。

どこか機嫌が良さげな夏乃に聞こえないように小さくため息を吐き、あの三人を納得させられるようなもってもらいたい言い訳を考え始める俺であった。

第24話（7月）～恋愛か友情か？～（後書き）

そんなこんなでやっとこさデート？開始ですw

第25話（7月）デート？ 開始

「……遅え」

右から左から、どこにこれだけの人がいたのかと疑問に思う程の  
通行人達が視界を横切っていく中、何を表現したいのか理解に苦し  
むモニュメントに背中を預け、俺は苛立ち混じりに呟いた。

.....

昨日の別れ際、宮下家の玄関前で会話まで時間を遡る。

「そいじゃ佳ちゃん、明日午前九時に駅前集合ね」

「駅前ってかなりアバウトだなおい……。かなり範囲広いだろ。せ  
めてバス停の前とかにしろよ」

「む……。まあ一理あるわね。んーそれなら……。あそこかいいい  
じゃない？ 東口に建ってる像の前とか」

「……そんなんあったか？」

「あるってば。ほら、なんて言うかその……。どことなーく猫っぽい  
感じの像が建ってるじゃん？ 知らない？」

「……？ 俺あ電車なんざ使わねえからな。あの辺りはさっぱりだ」  
「佳ちゃん守銭奴だもんねー」

「ったりめえだつての。時間さえかけりゃチャリンコで行けねえ所  
は無え」

「……うん、その考えはとっても佳ちゃんらしいなーって思っけど、  
明日は電車乗る？」

「何でだよ？」



「だってデートなんですぜおにーさん？　せつかくのデートで女の子と二人並んでサイクリングってのはちょっとアレだと思いませんか？」

「だからデートじゃねえつつってんだろ！」

「んっふふー、まあとにかくそんな感じでよろよろー。楽しみだからって寝不足で明日遅刻すんなよー？」

.....

結局、口では色々言っておきながら『デート』と言う単語に負け、俺の愛車は現在駅の駐輪場近くの歩道に違法駐車してある。

「……ったく。チャリンコ停めるだけでいちいち金なんか払ってられっかってんだ」

……いや、それにしても、しばらく駅に來ないうちに駐輪場が有料になってるなんて知らなかった。『まあ他にも何台か停めてあったし、多分大丈夫なんだろう』なんて心の中で開き直ってはみたものの、その隅っこの方では『業者に持ってかれてたら学校の登下校どうしよう』なんて不安がっている辺り、俺も中々に臆病者である……まあ、今大事なのはそのことじゃない。

「……………遅い」

既に本日六度目となっている呟きと共に携帯電話をポケットから取り出し、こちらはもう何度目になるのか分からないが、現在時刻の確認をする。

だがそんなに何度も何度も携帯のディスプレイに目をやったところで、時間の流れが速くなるなんてことは普通に考えてあり得ないわけで、現在時刻は前回の確認から一分も経過していない午前九時

三分、待ち合わせの時間からまだ三分しか経過していない。

別に俺は時間にこだわる神経質なタイプの人間じゃないが、三十分も待たされていれば、流石に誰だって苛立ちもするだろう。

……いや、待ち合わせ時間の三十分前に来た俺にも責任はあるんだが……いや、よく考えれば責任は最初から俺にしか無いような気がしてきた。

とまあそんな下らないことを考えながら像の周りを狂犬病を患った犬よろしくぐるぐるうろ回ること更に三分。

「はいはいおっ待たせーっ！」

聞き覚えのある明るい大声に、声のした方へ振り向く。

妙にハイテンションな女が、人目も憚らずにぶんぶん手を振りながら駆け寄ってくるのを、視界に捉えた。

「……………」

あー……遠目だから誰なのかよく分か……るな、うん。

いや、考えなくたってもう充分丸分かりなのだが、それでも出来ることなら分らないことにしておきたい。

たとえ好きな人だろうと幼馴染みだろうと、他人のふりをしたい時だって、この世にはあるのだ。

……なんて俺の心中での葛藤など知る由もなく、真っ直ぐにこちらへ走り寄ってくるハイテンション女もとい夏乃。

「その様子だとちゃんと時間通りに来てたっばいね、偉い偉いつ」

俺の頭を撫でようとしたのか、伸ばされた手を軽く叩き落とす。

「……一つ言いてえ」

「？ 何かな？ あ、ちなみに待ち合わせ時間に六分遅れたのは道路が渋滞してたからなのでその辺は悪しからず」

……いや、そんな満面の笑顔浮かべて明らかに嘘と分かる言い訳をされてもコメントに困る。

こちらとしては『悪しからず』の用法や、自転車に乗っていて交通渋滞に巻き込まれた経緯について、小一時間問い詰めたいところ

ではあるが、今はそれよりもまず優先して言いたいことがある。

俺は仏頂面のままゆっくりと後ろの石像を指差して思い切り息を  
吸い、

「この像は、少なくとも俺には、猫には見えねえっ！」

人目をはばからずに大声で叫んだ。

第26話（7月）～三者三様～（前書き）

いや、これが本年度初投稿って……いや、学生さんは無駄に忙しかっただです汗

本年度も、こーしょーをよろしく願いますm（ ）（ ）m

## 第26話（7月）～三者三様～

「いっつも言ってるけどもさ、佳ちゃんにはどうにも、色んな視点から物事を見るって作業が足りないと思うわけですよ私めと致しましては」

「せっかくの休日勉強の話を持ち出すな。大体な、あれをどうやって見りゃ猫になるってんだよ？」

訳の分からん口調については敢えて何も触れないでおく。

ちなみに、問題のオブジェの題名は『青春』。

すぐ下の台座に設置されてた解説文曰く、『大人達がかつて経験し、そして若者がこれからも経験していくであろう思春期。その中で生まれる葛藤、苦悩、瞑想、そして成長……そういった諸々を石像という形で表現した』とか何とか。

地元生まれの有名な彫刻家に創作を依頼したものらしい。

まあ、芸術を解する人間が見れば大層な作品なんだろうが、素人の俺に言わせれば『只の石塊』の一言に尽きる。

「むー……七恵は納得してくれたのになー……」

心底不満そうにぶーたれる夏乃。

「そりやお前、お世辞ってやつだろーよ。否定すんのも可哀想だしとりあえず同意してやろうって優しさだ。いい友達持ったな」

こいつ並みにネジの外れた感性を持つている人間がそうそういるとも思えない、と言うか思いたくない。

「ちっ違っよっ！ 『あー猫かあ……』」

……うん、そう言われてみるとちよっところ、斜め下の方から見上げれば猫に見えなくもないかなー、ははは『って言ってたもん！』

「それを肯定の意ととれる辺りがお前の長所なんだろうな」

短所とも言うのかもしれないが、とりあえずはその無意味に長い三点リーダーに疑問を持てと言いたい。

七恵さんとやらが普通な感性を持っていることに安堵し、素直に『猫には見えない』と言ってやれない辺り、きつと気の弱い子なんだろうなあなどと会ったこともない彼女に思いを馳せつつ、むくれる夏乃の顔から窓の外を流れていく景色へと視線を移した。

目的の映画館は三駅ほど先である。時間にして十分ちよい、といったところらしい。

席を確保できなかった俺達は、並んで吊り革につかまりながら、目的地への到着を待っている。

前述したように俺はほとんど公共の交通機関なんてものを利用しないタチなもので、これが多いのか少ないのかはよく分からないが、休日の午前中なら、もう少し人が多くてもいいような気がしないでもない。

「あ、そう言えば佳ちゃん、他の約束はどうしたの？」

「半ば強制で承諾させた癖に何を今更……ってか俺、用事あるなんて言っただか？」

いや、先約があったと言えばあったわけだが。

「ん？ んー、まあ女の勘ってやつかなー。その反応から察するに、私の直感も捨てたもんじゃないっばいね」

何か得意げに笑ってやがるが、用事があると気付いていた上で選択の余地を無くしているってことは、確信犯だったらしい。

「……夏乃、こっち向け」

「ん？ 何かなっ……ってあ痛たたたたたたたっ痛い痛い痛いっ！」

警戒心の欠片も持たずにこちらを振り向いた夏乃の頬を、空いている右手でぎりぎりつつねる。

「おっ女の子に暴力振るうなんて佳ちゃん最て痛たたたたたごめんなさいごめんなさい事情は良く分からないけど謝りますからこの手を離して下さいお願いしますからっ！」

今回と言っ今回は流石に頭にきたので、つねる力を強くするに加

えて右にみょーんと引つ張つてみる……おお。人間の頼つてのは結構伸びるもんだな。

……いや、自分でも女の子に手を出すのは褒められたことでないのは重々承知済みである。

だがそれでも、昨日の俺の精神的苦痛と、近い未来に約束された悲劇を考慮に入れば、頭に拳骨落とさなかったただけでも感謝してほしいくらいなのだ。

.....

ケースその一。北澤信次の場合。

『どうした佳祐？ 大抵の用件メールで済ませるお前にしては珍しい』

「あ、いやな、明日の話なんだが……」

『……その口ぶりから察するに、来れなくなつたんだろ？』

「あー……その……はい」

『そうか……』

「……………申し訳ない」

『ん？ あーいやいや、まあ急な用事が入つたなら仕方ないだろ。』

休みはこれからなんだし、遊ぼうと思えばいつでも遊べる』

「そう言つて頂けると本当にありがたいですはい……」

『ただなあ……俺一人であいつら納得させるのは流石に無理だろうからな、悪いが佳祐、二人人ところにも行けなくなつたと伝えてくれないか？』

「？ 上野はともかくとしても何で美月まで言わなきゃならねえんだ？」

『お前って奴は……いいからかける。美月の番号知らないのなら俺が教えてやるからとにかくかける。いいな?』

「ま、まあ……とりあえず了解したども、何でお前が美月の番号なんか知ってるんだよ?」

『今日訊いといたんだよ。急な変更あるかもしれないからってな。』

『いいか言っぞ? 090 ……』

「あ、ちよつ、ちよつと待てっ……メモメモ……」

ケースその二。上野雄大の場合。

『あいあいこちら上野雄大の携帯電話でございます早速ではございますがご用件をどーぞっ!』

「……前々から思ってるんだがそのハイテンションな電話の出方は止めた方がいいと思うぞ?」

『なーんだ佳祐かー。いつぞやも言ったがこれ俺の美学なのさっ! 例え満員電車の中だろうとこのポリシーを曲げるつもりは無いね!』

「そもそも電車の中で電話に出るんじゃねえ」

『うっさいわよ雄! あんたの声でかくてテレビの音聞こえないんだからもうちよつと静かに喋ってよ!』

『あーごめーん!』

「今の誰だ? お前んとこの母ちゃんにしちゃ随分声が若々しかっただけ」

『んー? うちの姉ちゃん』

「あ? お前んとこ兄弟なんかいたの?」

『あれ、俺言ってなかったっけ? 上に二人姉ちゃんがいるんだけど、どっちもとくに家出て一人暮らししちゃってるんよ。上の姉ちゃんは主婦で、真ん中の姉ちゃんは大学生。そいで今の声は大学終わったってんで帰省してる真ん中の姉ちゃん』

「あー……まあお前んとこの家庭の事情の話はまた今度ってことでそれよりもちよいと話がある」



「んー？ 何だよ何だよもしかしてあれか？ 恋の相談ってやつかあ？ そういうのなら百戦錬磨の俺に任しとけ？」

「……もしそうだったらそもそもお前にや電話しねえよ。負け戦しか経験してねえ人間に恋の相談なんかするかボケ」

「ほんつつつとあんたって子は口が悪くなっちゃって……母さん悲しい」

「お前みてえなガタイのいいお袋にや産んでもらった覚えも育ててもらった恩もねえよ」

「そいで話を本線に戻すが、何の用件だ？ 明日観る映画が決まったんか？」

「変わり身早いなおい……まあいいや、俺明日行けなくなっただから」

「……上野？ どうした？」

「……っざけんあああああああああああつ！」

「っ！」

（数秒間のハウリング音）

「雄っ！ あんたホント何回言えば分かんよ！ 声がでかいって近所から苦情来てんだからね！」

「うっさい今それどころじゃないんじゃないっ！ いいからとにかく考え直せ佳祐っ！ どんな用事かは知らんがそんな重要じゃねえ！ 断れ！」

「あー上野？ とりあえず落ち着いたほうがいい」

「ぼけつてあんた……っ！ 姉ちゃんに向かって何て口きいてんのよ！」

「だーから今それどころじゃねえんだっての！ テスト明けで疲労困憊な脳みそフル回転してよおおおおお考える！ お前がいなくなったら俺と委員長と北澤の三人なんだぞ！ 基本北澤無口なんだからホラ、どうなるか想像するだけでこちとら首吊って死にたくなるぞ！ お前ってクッション材がどうしても必要なんだよおっ！」

「だ、大丈夫だろそんな心配しなくても……ってか何か後ろの方が

ら階段登ってくる音聞こえるけど大丈夫か？」

『もー今度という今度はあつつつたまきたっ！ あんたの性根をこの愛の聖拳で根っこから叩き直してやるっ！』

『うおっ姉ちゃ……ちよっ、待つ、痛い痛い痛い！ 今友達と話し  
げひゅっ！』

『修正！ 修正！ 修正！』

『おうひゅっ！ ……佳祐でめえ覚えとけこんちくしよぶふおっ！  
待ってねっ、姉ちゃんこっ、これ以上ボディーはっ！ ボディー  
はあああああっ！ ああああああ  
(ここで電話が切れた)

ケースその三。美月伊空の場合。

『……はい美月ですが、どちら様でしょう？』

「あー……その、高井田だけでも。番号は北澤に訊いたんだ」

『……佳祐君？』

「あ？ あ、ああ」

『どうしたのこんな時間に？ 明日の集合時間に変更になった？』

「いや、そうじゃなくてな……その……あ、明日さ、俺急な用事で  
行けなくなっちまったんだ。それを伝えようと思って」

『……もしかして、私がいるから？』

「あ？ いや、そんなつもりじゃ」

『ううん、分かってる。私が告白してからずっと佳祐君私のこと避  
けてたもの。いいの、私が行けなくなっただってことにするから、三  
人で映画、楽しんできて』

「いや、だから違うって！ 美月のせいじゃないんだホント！ い  
や、確かに美月のことはどうしても避けちゃってたんだけど、そ  
れとこれとは話が別で、前々から約束してたことがあったんだがそ  
のことすっかり忘れてたから……あーくそっ！ と、とにかく美  
月のせいじゃないってのは嘘でも何でもない！」

『……ふふっ』

「あ、あの……美月？」

『ごめんなさい、何だか佳祐君が必死なのがおかしくて……分かった。明日は北沢君達と遊ぶわ』

「お、おう……何かよく分かんがホントに申し訳ねえ」

『ええ、それで？ 用件はそれだけ？』

「お、おう」

『……分かった。それじゃお休みなさい』

「あ……ちよつと待ってくれ」

『？』

「その……何だ、返事なんだが……もう少し時間くれないか？ お、女の子からの告白なんて生まれて初めてでよ、どうすりゃいいのかわかんねえんだ……何て言うか、自分の中でちゃんと整理がつくまでは返事できねえんだ」

『……分かった。待ってる』

「ホント優柔不断でごめん……それじゃまた学校で」

## 第26話（7月）～三者三様～（後書き）

大変残念なお知らせがあります（・・・）

楽しみにしてくださいださっている皆さんには大変申し訳ないのですが、

「不器用なあいつの彼女」の更新を凍結しますm（――）m

執筆作業は細々と続いているのですが、どうにも遅々としておりまして、このまま前編だけを発表しておくのはなんだか私的によろしくない感じがしまして、こういった決断に踏み込みました。

近日中、必ずや皆様の目に、三人の恋模様の結末をお送りする所存ですので、もうしばらくの猶予を下さいm（――）m

## 第27話（7月）〈将来の夢〉

「……なんか分かんないけどごめんなさいでした」

「ん、それでいい」

つねられていた右頬をさすりながら、涙目でぶんむくれている夏乃と共に、電車を降りる。

「てかさ、そんなに大事な用事だったんならそっち優先させればよかったじゃん。私だってそこまで強制するわけじゃないんだし」

「む……まあ、そりゃそうなんだがな」

確かに夏乃の言う通りではある。

だがもし仮に、そう、例えば話でしかないが、図書館で勉強コースやら、先に約束したのはどちらか、等の要素を全く抜きにしたら、俺はどちらを選んでいただろう？

改札へと向かう人の流れに沿って歩きながら言いよんどんでいると、  
「……佳ちゃんってば何でそんなに勉強毛嫌いするかなあ」

大方、俺が勉強したくないがために用事を断った、とでも勘違いしたんだろう。

ため息混じりにばやく夏乃のふくれっ顔には、先程とは違った意味合いが込められているように感じられる。

「つたり前だ。勉強好きだなんて仰る人間ってのがこの世におわすんなら一度お目にかかりてえもんだ……あ」

「？ どったの？」

「いや、そう言やここに一人いたなーって」

「私のこと？」

「お前以外に誰がいる」

いや、そうでもなければ誰が好き好んで毎晩毎晩人に勉強を教えたりするだろうか？

「んー……まあ否定はしないでおこっかな」 馬鹿にされてるわけじゃないしねー、と、照れくさそうにえへへー、と笑った。

まあ、こちらとしては別に褒めたわけでもなかったのだが。

「…………なあ」

「ん？」

「今思ってたんだよ。お前、先生にでもなったらいいんじゃない？」

その笑顔を見て、ふと浮かんだ思い付きを口にする。

「え…………？」

俺の冗談めかした提案に、何故だか夏乃の笑顔が消えた。

「あ、いやな、お前、教え方上手いし、そういう職業向いてんじゃないかと思つてよ」

それもほんの一瞬で、すぐに元の笑顔に戻ったが、

「…………先生かあ。んー駄目駄目っ。私に先生は無理だよ」

「？ 何で？」

「ほら、私つて気が弱いから生徒になめられちゃうだろうし」

困ったように微笑む夏乃。

「あ…………」

夏乃には悪いがフォローの言葉が見つからない。

「それに私、獣医さんになりたいから」

「獣医？」 思わず訊き返す。

幼かった頃のこいつの趣味嗜好を思い返してみるが、動物が好きだったようには見えなかった。

確か中学時代だったか、下校途中に野良犬にしばらく追っかけ回されたこともあったし、むしろ嫌いな部類に入るんじゃないだろうか。

余談だが、俺も夏乃とは別の理由で動物は苦手である。

「まーねっ。とりあえずその話はまた今度つてことで」

と、次の瞬間、夏乃は何か思いついたような顔をして、

「あ、そう言えば最初の頃の佳ちゃんひどかったよねー。特に化学」  
「ここがつねられた反撃のチャンスだ、とでも言わんばかりに、反撃のチャンスだ、とでも言わんばかりに、にまあっという擬音でも聞こえてきそうな笑顔を受かべた。」

「…………それを言うんじゃない」

当時のことを思い出すと、自分の余りの不勉強さに、思わず自己嫌悪に陥りかねないのだが、「一番初めの勉強会の時だったっけ？

『モル？……ミリリットルの近縁種か？』って言われた時は流石の私も哑然としちゃいましたですよ、はい」

そんなことはお構い無しだと言わんばかりに、チエシヤ猫を髭髯とさせる笑顔で、人の古傷をこりこりつと抉る夏乃。

余談ではあるが、分子量の単位であるモルと、容量の単位であるミリリットル、言うまでもなく、両者は異なるものである。「……いや、だってよ、表記の仕方考えてみるよ。エム、オー、エルとエム、エルだろ？　おら、似てるじゃねえか。間違ったっておかしくね」

「はいはい、化学の授業真面目に聞いてなかった人間の言い訳なんて聞きたくありません」

「ぐっ……」

勉強の話となると、こいつに反論できない。

そんな俺に一から丁寧に基本を教えてくれたのはこいつであり、そのおかげで授業の理解度が増していったのも、これを認めるのは誠に遺憾ではあるのだが、紛れもない事実なのである。

「……ったく、あーも分かったよ、分かりました。要するに俺あ馬鹿だって言いてえわけだろお前は」

「ん。自覚があるのはいいことだとお姉さん思います」

……いや、紛れもない事実ではあるのだが、満足げにくくく頷く夏乃を見ていたら何だかまた腹が立ってきたので、

「え？　あ、痛っ、ちよっ、あだだだだだだっ！　捻りをっ！

捻りを加えるのは流石にキツいってば佳ちゃだだだだごめんなさいごめんなさい調子乗っちゃってごめんなさいっ！」

## 第28話（7月）～波乱の予感～（前書き）

大幅な更新の遅れに関しては、もう何と云うか謝罪の言葉しかございませぬ……汗

只今精神状態が非常に不安定な感じでして、執筆作業もままならない状況です。

更新停止、という事態だけは避けられるよう、精一杯努力していきますゆえ、見捨てないで頂けると本当に嬉しいですm（――）

m



## 第28話（7月）～波乱の予感～

どこの街でも大概共通して言えることだが、大きな駅の周辺地域  
つてのは、その街で最も文明レベルが発達していることが多い。

俺達が暮らしてる街もその例に漏れず、駅を出て数分歩けば、八  
階建てのそこそこ大きなデパートが建っている。

そしてその最上階が今日の目的地、この街唯一の映画館だ。

フロア一つをまるまる占領したこの映画館には、大小合わせてス  
クリーンが八つあり、常時、洋画邦画ついでに韓流映画問わず、複  
数の映画が公開されている。

他の映画館には行つたことは無いが、まあ普通の映画館より大き  
いんじゃないだろうか。

「まあ問題は、こんな田舎町にこんなでつけえ映画館建てたところ  
で、採算取れる程の観客が来るのかってとこだろっがな」

「ん？ んー……どうなんだろ？ 言われてみたらここが満員にな  
ってるのって見たこと無いかも私」

そんな会話を交わしながら、自動ドアをくぐって薄暗い館内に入  
る。

比較対象を知らないので何とも言えないが、普段よりも混んでい  
るような気がしないでもない。

夏休み恒例となっているアニメ映画を観たいと子供にせがまれた  
のしろ。チケット売り場に並ぶ客の大半は親子連れだ。

「そこそこ名あ知れたやつの公開初日ならすげえぞ？ チケット売  
り場からその自動ドアまで長蛇の列が出来る」

かく言う俺も、その長蛇の列を構成した一人なわけだが。

「ふーん……私とかはよっぽど観たいもんじゃない限りはDVD借  
りた方が安上がりだと思っけどもな」

「この馬鹿たれ。でつけえスクリーンで、大音量で観ることにこそ

価値があるんだよ。家の小っせえテレビなんぞで観たらせつかくの興奮も感動も半減だ」

「ふっ、甘いね佳ちゃん。昨日好奇心で買って飲んでみた冬季限定ホワイトチョコラータ並みにただ甘だぜっ。私ん家のテレビは大画面のプラズマ、ついでに置物みたいでっかいスピーカー付きなのさっ」

「何言うかと思えば……ばれっばれな嘘ついてんじゃねえよ。お前んとこのリビングのテレビ、ありやどう見たってブラウン管だろ。スピーカーも無えし」

その辺は夏乃との勉強会でちよくちよく邪魔しているので、勝手知ったる何とやらである。

「うん、居間のはね。でも実はですね、我が家にはＡＶルームが存在してるのですよ」

「ちよっ、ＡＶルームっておま」

「あー何勘違いしてんだか知りま……ううん、大体予想はつきますけども。補足しとくと、オーディオヴィジュアル、略してＡＶね。簡単に言えばＤＶＤ鑑賞部屋」

「………知ってたつての」

「……ふーん。あ、そうですか。ならいいんだけどもさ」

そして何を勝ち誇っているのか知らないが、自慢げにふふん、と鼻で笑いやがる夏乃。

「……くおんのブルジョワが！」

「ふぎゅっ……！？」

……まあ、二度あることは三度ある、というわけで省略。

と言うか宮下家の財政難は、そういった金の無駄遣いが一因なのではなからうか、なんて不安がちらりと脳裏を過ぎるのであった。

「たいちよー。何だかワタクシ、たった一日で頬の皮膚がかなり伸びた気がするでありますけども……」

「おーおーそりや大変だ。でもまあ若いんだから二日くらい経ちゃあ元に戻るんじゃない？ そいで観んのはどの映画？」

涙がうつすら浮かんだジト目でこちらを睨む夏乃は軽くスルー。

「……………あれ」

夏乃はまだまだ文句を言い足りないさげだが、それでも不承不承、といった風に貼られているポスターを指を差す。

「どれど……………れ……………」

指差す先を視線で辿っていく。

と、そこにあつたポスターを見て、無意識に唇の端がぴくりとひきつった。

夏乃の人差し指が指し示す先にある上映作品案内には、まあ当然だが恋愛SFファンタジーアニメなどなど、様々なジャンルの作品のポスターが掲示されている。

そしてその中であつて、黒地の背景と、いかにもホラーといったレタリングがなされた白抜きタイトルとのコントラストが一際異彩を放っているポスターが一枚。

その隣に夏休みアニメスペシャルのポスターが貼つてある辺りに経営者の悪戯心を逸脱した悪意を感じるが今の問題はそこじゃない。問題なのは、夏乃の華奢な指先が、そのポスターにピンポイントで向けられていることだ。

「……………ホラー、だな……………うん、ホラーだ」

「？ うん、確かにホラーですけども……………私ホラーって言ってたじゃない」

「ああ、確かに言つてた……言つてたな、うん」

『この夏最大の恐怖があなたを襲う』とか何とかってキャッチコピー掲げた、十五歳未満は観れないようなスプラッタ表現爆発ホラーらしいつてのは、最近しょっちゅう放映されてるコマーシャルで知っていた（コマーシャルの時点で結構キテるので、正直直視が出来なかった程である）が、まさかそれを観ることになるうとは……。

「ん？ ……………あれあれあれえ？ どしたんですか高井田君？ もしかしてひよつとしてひよつとしちゃうとアレですか？ ホラー映画が苦」

「ただだ大好きです！ ホラー映画マジ最高っ！ 血飛沫スプラッタだと来いつてんだ馬鹿野郎っ！」

悟られるわけにはいかないと夏乃の言葉を遮って否定したものの、こついつた精一杯の虚勢は大抵逆の効果を生み出してしまふものである。

「ふううん、そう？ それなら良いんだー。まあもし佳ちゃんが怖い観たくないって言うなら別々の映画観るっててもあつたんだけどもねー」

「あ、お、俺そう言や第一スクリーンでやってる映画前から観たかつ」「あーでもこの映画、他のと時間かなりずれちゃってるし流石に無理っぽいかなあ…………それで佳ちゃん、今何を言おうとしたのかな？」

「ぐっ…………」

間違いない、今のは絶対分かつて言つた台詞だ。

そうでなければ、こんな落馬した敵将の首めがけて刀を振り下ろした戦国武将を髭鬚とさせる顔はしない。

数秒後には首級揚げながら『敵将、討ち取つたりいっ！』とか何とか叫んでいそうな表情である。

返す言葉が見つからずに黙り込んでいる俺の姿を見て勢いづいた夏乃は、ここが勝機と言わんばかりにがんがん攻め込んでくる。

「ふっふーん、ま、別に私は他の映画観てもいいんだよ？ 佳ちゃ

んがホラー苦手だつて一言言ってくれば」

「……ぐぐぐ」

いつぞやも言ったような気もするが、実はホラーが大の苦手である。

苦手なのだが、ここで苦手と言ってしまったら男として負けな気がする。

だがそんな下らないプライドなぞ犬にでも食わせてしまえと必死に訴えかける弱気なもう一人の自分もいることはいるわけで。

「あれあれえ？ 何だか佳ちゃんの顔色が段々悪くなってきたるなあ？ ホラーが苦手なら無理なんかしない方がいいんじゃないですかあ？」

「……っけんな」

「んん？ 今なんて言ったの？」

「っざけんじゃねえってんだくおのアホナスっ！ いーぜ観てやろうじゃねえか！ おら行くぞっ！」

結局下らないプライドが全てを凌駕してしまった。

「あ、ちよっ、ちよっと待ってよ！」

俺が逆上するとは考えていなかったのか、やけくそ気味に叫んでチケット売り場へとずんずん歩を進める俺の後ろを慌てて追いかける夏乃。

まあ今にして思えば、ここでプライドかなぐり捨てて一言『ホラーは無理っす』とでも言っておけば、この後の面倒ごとは起きなかったんだろうが、それは面倒ごとが起こると知った今だから浮かぶ考えであり、この時はこれが自分にとって最良の選択肢だと思っていたのだから仕方ない。

つまりは、『過ぎたことを今更どーこー言っても仕方が無い』のだ。

.....

左手には新製品らしいカレー味のポップコーン入りの紙コップ（コップというよりはバケツという表現がしっくりとくるＬサイズ）。右手にはコーラ入りの紙コップ（途中でトイレに立つ危険性を考慮してこちらはＳサイズ）。

映画鑑賞用の完全装備を肘掛のホルダーに装着し、無駄にクツシヨンの高い椅子にどっかりと腰掛ける。

どうでも良いが『よいしょ……っ』なんて小さく呟きながら俺の右隣に座った夏乃の装備は、両方ともＳサイズである。

上映時間五分前と言えば観客は既に座っているはずなのだが、薄暗いシアターの中、人影はまばらで、シートはそのほとんどが空席のままだ。

そりゃそうだよな……。

ビビりの俺に言わせれば、好き好んでホラー映画をわざわざ映画館に観に来る人間の気が知れない（だから今自分がその類の人間になっっていることが信じられない）。

「なんかさ、こう言う時間ってなんだかどきどきするよねー」

満面の笑みを浮かべ、嬉しそうに俺の耳元で囁く夏乃。

「ハハ、ソウダネー」

その意見は前面肯定したいところなのだが、今回は作品のせいで、高揚感よりも絶望感の方が先に立っている。

気分的には首に縄をかけられていつ床が抜けるのかと怯えている死刑囚、もしくは電気椅子に座らされていつスイッチが入れられるのかと怯えている死刑囚の心境を思い浮かべて頂けると理解してもらえと思う。

「……だっつつてんでしょーよ！」

「……からさつさと……」

「……う始まつちゃうわよ」

「……？」

高い天井を見上げながら戦々恐々としている俺の耳に、誰かが言い争うような声が聞こえてきた。

声色から察するに言い争っているのは女が一人と男が二人の計三人で、駄々をこねる一人を残り残りの二人が宥めているらしい。

音源は俺達がいるスクリーンの外。

「……どうしたのかな？」

夏乃が再び俺の耳元で囁く。

夏乃にも聞こえてるってことは幻聴じゃないらしい……ってちょっと待て？

声は少しずつ俺達のいるシアターに近付いてきているのだが、その音量が増していくにつれて段々と聞き覚えのあるものへと変わっていく。

「いや、なんつーか……心当たりがある」

本来ならば慌てなければならぬところなのだが、思考回路が麻痺してしまっているのか、場違いなほどに俺の思考は冷静である。

考えすぎか、そうでなければ他のスクリーンに行きますようにという俺の願いも虚しく、

「やだやだやーだー！俺あホラーなんか観ーたーくーなーいーっ！」

「いい年して駄々なんかこねるんじゃない……他の映画と時間が合わないんだから仕方がないだろ。いい加減に観念してくれ」

「それ以前に夏休みアニメスペシャルを観ようとする上野君の思考回路が私には理解不能ね……」

「ああ、それはこいつの精神年齢が低いだけ。だから深く考えなく

ていいと思う」

「見た目は大人、頭脳は子供！ 俺はいつまでも少年時代のピュアハートを抱き続けるんだっ！」

「だそうだ……」

「……呆れて言葉も出ないわね」

「……佳ちゃん。もしかしてあれ、お知り合いさん？」  
不安げな声色で囁きかける夏乃。

「……誠に遺憾ながら」

スクリーン入り口でぎゃーぎゃー騒いでいる上野、北澤、美月の三人（と言っても騒いでいるのは主に上野なのだが）を見下ろし、これからどうしたもんかと暗澹たる思いを抱きながら俺はため息混じりにそう答えるのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5931a/>

---

前へ踏み出す一步

2010年11月17日14時27分発行